

# 肥前名護屋城下町の空間構造とその特異性

宮武正登

The Spatial Structure of the Castle Town of Hizen Nagoya and Its Peculiarities

はじめに

- ① 名護屋城の成立過程
  - ② 城下の都市的興隆の具体相
  - ③ 空間復元のための基礎的史料の吟味
  - ④ 城下町の構成要素と内容
  - ⑤ 城下空間の基本構造とその特異性の意味
  - ⑥ 城と城下町との連結状態に現れた矛盾点
- 結びにかえて——名護屋城下町の本質とは

## 【論文要旨】

豊臣秀吉が朝鮮侵略の拠点とした肥前名護屋は、その特殊な性格と成立事情ゆえに、都市を主題とする議論の対象としては、従前から等閑視されがちな存在であった。しかし実際には、その広範な遺構展開と旧景観の遺存状況の良さからしても、当該の都市のメルクマールとなる構成要素の具体的内容を探る上で、極めて有用な研究素材となり得ることを本論では第一に提言している。

商人誘致を目的とした政権側による市場操作などの施策を背景としつつ、軍需景気の勃興に沸く名護屋城の周囲には、「国際都市」と評価されるに足る商業圏が発生していた。一見するとその空間構造は、名護屋城を核として、豊臣直属軍が滞在する屋敷地区と町場地区とが港に向かって縦列配置された一元的な構成に見える。しかし実態としては、港湾機能に依存して自然発生した町場と、城との連携を前提とした武家屋敷地区とが、それぞれの派生方向を違えたまま隣接していたにすぎず、起伏の激しい地勢環境に空間分化を委ねたままの、統一的計画性の希薄な都市的空間であった。

特に町場の実相は、軍用物資や築城資材などの物品別管理地の延長にあるような、質的には建設途上の城下町の域を出ない状態のまま経済活動が開始したものと推測される。また、城下の中心区域の外縁には、大名陣所に付随するような立地を示す散在型町場が分布し、この城下町の重層的な構造を特徴付けている。しかし一方では、街路の走行状態や各屋地の敷地規模などに、大坂城下町や京都などとの共通性を認めることもでき、近世城下町成立期の時代的特徴を部分的に備えている点は重視できる。

こうした特異性の発生理由は、秀吉の即時渡海を前提とした基地設定当初の基本方針を直接的原因とする。それが、戦争の長期化により名護屋の「首都化」が進むにつれて、臨海型城下町への志向性を高めたものと考えられ、城の求心方向に全く関係しない導線設定により城下との直接的結合が強引に図られた。ただし、包括的な都市改造に到達しないまま機能停止を迎えたため、様々な矛盾点を抱えた未完成の都市の形が残されたと考えられるのである。

## はじめに

中世都市から近世都市への転換にあたって、織豊政権の全国制覇に伴い輩出された城下町が果たした役割の重大さについては、一九八〇年代以降に急増を見た大坂や京都など中央巨大都市の再分析の試みと、近江八幡<sup>(3)</sup>、有岡<sup>(4)</sup>、清洲<sup>(5)</sup>といった地方城下町の構造の検証を重ねた結果、今や常識化された概念となっている。そして、その「近世的」な城下町（近年では「真性」城下町なる類型規定も見られるが）の発生原理および構造上の諸特性は、大名権力の中枢移転に見られる城下町の段階的成熟過程（吉田郡山→広島、春日山→福島→越後高田といった例）の追究によって、より明確かつ具体的な定義付けがなされている。

それらの形態的特徴の大略を整理すれば、まずは城下町規模自体の拡大化があげられる。そして、都市の構成単位である武家居住地区・町人居住地区・宗教施設の集合体（寺町）の三要素の一元化を前提とした、相互共存・分立状態を理想像とする計画的な空間区分の徹底といった点に集約できるだろう。

この基本的形態の規範に該当する「天下人」の城下町の実態については、現代都市と化した京都・大阪・東京の中での、著しい調査上の制約を受けた希少な考古学的成果と、歴史地理学や建築史学の方法論を駆使した過渡的分析の蓄積とによって、解明に向けての着実な進展を見ている。しかし残念なことに、面的なボリュームを保った「実物」が残っていない以上、議論のための材料はおのずと限定されざるを得ない。

本論が対象とする肥前名護屋城跡とその周囲に発生した「集落」は、その後の大規模開発の危機を免れたがために、豊臣政権直営の城郭・城下空間の中でも唯一完存に近い状態を保っている。それゆえに、今後の学際的調査の進展次第では、近世城下町の過渡的形態の実像について、

かなりの具体性を伴った補強材料を与えてくれる可能性を秘める。にもかかわらず、都市に係る学史の中では、この好個の素材が議論の俎上に乗ったことは驚くほどに少なく、ほとんど手付かずの状態にあると言っても過言ではない。

最初に名護屋の空間復元を試みたのは内藤晶氏であった。<sup>(8)</sup>これは、後述する『肥前名護屋図』屏風に描かれた建築物の分析が主眼であったため、都市形態の検討にまで論及したものではなかったが、この仕事により名護屋の構成要素の配列の、おおよその「骨格」が定まったと言つて良い。

その成果を踏まえながら、この地を都市の分析対象として最初に直視したのが松本豊寿氏であった。<sup>(9)</sup>氏は、戦国期城下町の武家地の特性と近世的「町人町」の特性とを両有した、過渡的城下町という評価を与えつつも、「基地の町」としての異質性を強調し、特に町場については、軍事機能の効率化を目的として権力主導により設定された世界という解釈を下した。最終的な氏の「名護屋」評は、以下のような結語に明瞭に現れている。

「この基地の町は、一般のそれとはことなつて、壮大豪壮な城郭をもつ空前の大基地の町である。城下町ではないにしても、形の上では、城下町的ないろんな性質——これはまた否定できないところである。」

「名護屋はなるほど、城の下の町（城郭都市）である。この意味では、城下町的といつてよい。しかし城下町概念規定からいえば、これはけつして城下町ではないはずである。豊臣氏の場合、その城下町はあくまでも大坂であり、その陪都である伏見である。」

「名護屋は城下町ではない。従つて、いきなり城下町の類型思考をもつてくるのは、げんにさくべきである。」

氏の論に前後して、岩沢愿彦氏<sup>(10)</sup>、中村質氏<sup>(11)</sup>によって文献史からの名護

屋をめぐる基礎的史料の整理がなされたが、その後の議論については、事実上、松本氏の評価に固定化されてしまった観が強い。

しかし、改めて考えてみると、名護屋城下が純粹な「町」として規定されなかったのは、必ずしもその形態的特徴を根拠としていないように思う。臨時設営の要塞に付随した「町」としての特異性、秀吉の野望の頓挫による存在理由の途中消滅という史上の結果論からくる既成概念が、松本氏の説には支配的に存在している印象が否めないのである。

そこで、なお多くの検討の余地を残すこの軍事「集落」について、当該期の目撃者の「名護屋」評を確認しながら、規模、構成要素の実態とその配列状況について再整理を行い、空間形態から見た場合に果たして「都市」と認識できる存在たり得るか否か、また、純然たる城下「町」ではないとすると、どのような点で「異質」であるのかといった、根本的な問題を解決すべく考察を重ねてみようと思う。そして、本論を成すことの最大の目的は、冒頭に述べたような成立期の近世城下町の実像解明のための、良質な検討素材の増加に供することにつきる。

名護屋は、先行する中世集落の段階的發展の結果として成立した空間ではない。地域支配の拠点としての性格も持っていない。つまるところ、対外派兵の中継のためだけに設けられた秀吉「御座所」の周囲に、發展の脈絡を踏まえることなく突如として中央から持ち込まれた大「集落」なのであり、その發生経緯からしても確かに特異な存在ではある。ゆえにこそ、当該の都市生活者（＝都市の形成・構成主体）が共通認識として持っていたはずの、「都市的空間」が具有していなければならないミニマムな要件——松本氏が言うところの「城下町的ないろんな性質」と恐らく同じ事象で、換言すれば城下町の標識となる最低限の要素——が、集約され、配列されているのではないかという関心が惹起されるのである。まずは、この巨大な素材の成立経緯を見るために、その中核をなした名護屋城の形成過程について再検証することから始めたい。

## ① 名護屋城の成立過程

天正十三年（一五八五）七月に関白に任官した豊臣秀吉は、早くもこの年の九月には対外出兵の意志を表明しているが、翌々年の九州制覇によってその構想は急速に具体化していった。天正十八年（一五九〇）十一月には、国内統一事業完了の祝賀を目的として来日した朝鮮通信使に對して、明国征服の意図と朝鮮国王に對する先導命令を記した書翰を託す。そして、同二十年三月十三日、秀吉は遂に九軍団編成の約十六万の軍勢渡海を諸大名に発令、四月十三日には小西行長らの第一軍が釜山に乱入した。日本史上で「文祿・慶長の役」、韓国史上では「壬辰・丁酉倭乱」と称される朝鮮侵略戦争の開戦である。<sup>(13)</sup> その渡海基地として、秀吉は当初、博多を第一候補に考えていたよう<sup>(14)</sup>で、小早川隆景による名島築城はその拠点整備の一環としての性格を兼ねていたものとも解釈できる。しかし、天正十九年に比定される相良長每宛の八月二十八日付・石田正澄書状<sup>(15)</sup>により、「御座所」設営が肥前名護屋に最終決定されたことが確認できる。これには「なこや御座所御普請、黒田甲斐守、小西撰津守、加藤主計被仰出候、筑紫衆者、軍役三分一ほとツ、用捨仕候へと御掟候」とあり、九州諸大名の渡海総軍役八万二千二百人の内の二万七千人前後の労力を充てた、所謂「割普請」による築城工事が開始されたことが理解できる。

ここで踏まえておくべきことは、豊臣政権内で研鑽を積んだプランナーの直接監督下で計画・施工が実施されている点であり、当該期の第一線の諸技術・築城理念が駆使されたことは疑いない。その意味においては、織豊「系」の城郭などではなく、政權「直営」の規範的スタイルの城郭が成立したものと見なければならぬ。まさしく豊臣氏のオリジナル・プランの城郭が構築されたのであった。

同年十月の着工<sup>(16)</sup>から築城に従事していた九州大名は、翌二十四月十九日の毛利輝元ら第七軍の釜山上陸までの間に順次渡海を果たしており<sup>(17)</sup>、同月二十五日には秀吉本隊が名護屋に到着している<sup>(18)</sup>。従って、この段階までには、天下人の「御座所」としての体裁だけは凡整っていたものと考えられ、その直前に着陣していた佐竹義宣の被官平塚滝俊は、竣工間もない天守閣を目の当たりにしている（「平塚状」）。また、秀吉が入城と同日に戦地の黒田長政へ宛てた朱印状<sup>(19)</sup>には、「名護屋作事、別而入念一段見事二仕候、殊更つほねくをはしめ、所々道具共調置候、奇特なる氣遣感入思召候」との褒詞が連ねられている。

この経過からすると、わずか半年前後という急ピッチの工事が実施されてきたわけ<sup>(20)</sup>で、天正十九年十二月二十七日に小西行景が発した、名護屋西隣の在地領主有浦氏に対する工事完遂のための協力依頼<sup>(21)</sup>には、「仍名護屋城御主殿為御作事奉行、拙者罷越候」とあり、早くもこの段階で主要部の石垣普請は完了していたものと推測できる。確かに同月、秀吉馬廻衆の八島増行が築城従事中の立花宗茂に宛てた書状<sup>(22)</sup>にも、「名護屋御普請大形相調申由承候」との慰労の言が見えることから、実に着工から三カ月弱で作事へと工程が進行していたものと見なさねばならない。

いずれにせよ、常識外の突貫工事が行われたことは間違いなく、その驚異的な工程の様子は、ルイス・フロイスによる次のような著述とも一致している。

【史料1】フロイス『日本史』<sup>(23)</sup>

「(老) 関白からそれらの築城を命ぜられた司令官たちの仕事は、実に正確に、また異常な努力をもってなされ、六カ月、もしくはそれ以内にすべてが完成したほどであった。」(三十一章)  
「日本の主将らは、それらすべての不可能事と信じがたいほど

の労苦をあたかも忘れ去ったかのように、各人は四、五万の人力を投入し、割り当てられた仕事を担当し、…(中略)…：わずか数カ月間で(老) 関白殿の広大な宮殿と城の諸建築は見事に竣工した。のみならず、その短期間に、同所にはまったく新しい一都市が出現した。」(三十五章)

しかし厳密に言うところ、とにかくも秀吉着座に間に合わせんがための、城郭中枢部のみの竣工と解釈せざるを得ない点が多々ある。以下に列举する証左により、実際にはその後も追加工事が継続されていたと見なければならぬ。

【史料2】(天正二十年) 六月二十日付・「こや」宛・豊臣秀吉書状「毛利家文書」九二五

「なこやにてとしおとり可申候、こうらいへはや大きくわんつかわけ候、なこやのふしんをさせ申候」

【史料3】七月二十五日付・有浦大和守宛・浅野長吉書状<sup>(24)</sup>

「名護屋にて丸一我等二被成御流、大造作被仰付候」

【史料4】「大かうさまくんきのうち」<sup>(25)</sup>

「なこや、御山さと、御ふしんの事、こんど、御せうらくのあひたに、御なわはりのことく、いでき申候。御はんまるは、かうざんにて、かせ、はげしくさふらふあいた、かんてんのあひたは、御山さと、御ざをすゑらるへきよし候て、しも月十二日、御山さとへ、御わたまし候」

【史料5】『神谷宗湛日記』天正二十年十一月十七日の記事<sup>(26)</sup>

「ナコヤニテ 一、太閤様ニ御会山里ノ御座敷ヒラキナリ」

【史料6】『大和田近江重清日記』<sup>(27)</sup>

- a 「御城普請見廻ニ大采同心ニ参」(四月十八日条)
- b 「御城之石敷普請付、御奉行与御状参」(四月二十九日条)
- c 「ナコヤへ参テ普請見廻、直宮御陣へ参。…(中略)…：罷帰直ニ御



前へ罷出フシン之事申上ル」(七月十五日条)

史料2により、秀吉入城後の普請続行が分明である。特に注目すべきは、秀吉の私的居住空間に相当する山里丸でさえも、大政所死去に伴う一時帰洛の間の天正二十年七月から十一月にかけて施工していたことを史料4によって知る点である。史料5の記述は、その落成時の「御披露目」茶会の開催を記したものと解釈でき、史料4にある秀吉の山里丸移座の日次とも整合している。

史料3については年欠なのだが、着工時期である天正十九年秋頃の浅野長吉(長政)の動向を追ってみると、同年九月四日に鎮圧した九戸政実の反乱後の奥州情勢沈静化のために現地采配を奮っており、必然、この「丸」(曲輪)築造従事の一件は翌年夏以降の工事として理解せざるを得ず、城内のいずれかの曲輪が、秀吉入城後になってから付設された事実を証明する例となる。因みに、城の最西端には「彈正丸」との曲輪が存在しており、真偽の程は確認できないが、長吉常駐の経緯からその官途名を付した曲輪空間として伝承されている。彼が担当した曲輪がこれに該当するとすれば、山里丸の例と同様に、追加施工箇所が主に城郭外縁部分を対象としていたことを示唆するものと見なせる。

さらには、着工から一年半以上も経過した文禄二年の夏になっても、城内の普請が実施されていたことが史料6によって明らかとなる。a、bについては、同年五月の明側講和団来日に備えての準備の一環であった可能性もあるが、講和団帰国後の七月にも普請が実施されていることがcによって確認でき、一連の追加工事の延長と捉えることができる。

これらのことから、名護屋城の完成時期が実際には相当ずれ込んでいくか、或いは城郭全体が漸次拡大傾向にあったものと見て間違いはない。築城着手に関する前掲のフロイスの著述の後半には、その具体的経過を指すものと思われる次のような記載が続く。

【史料7】フロイス『日本史』第三十一章

「とりわけ主力(の集結場)となる名護屋では、二つの巨大な城壁が造られ、それらは切断しない自然石で築かれた。内側の(城壁)は(外側のよりも)小さく、百ブラサ(平方)の面積があり、(その中に)(老)関白の宮殿が造られた。他の(外側の城壁)は後で造られ、最初の内側の(城壁)が完成した後であったが、それは(内側のとは)比較にならぬほど大きく、それらは二つとも無数の石で築かれ、まさしく都(聚楽亭)のと同様に、石垣による大きい堀に取り囲まれていた。(傍線筆者)」

ここに記されている如く、突貫工事による主要部の先行造成と、その後の城郭外周部の追加施工という名護屋城の段階的構築は、実は近年の考古学的調査によっても立証されつつある<sup>(31)</sup>。しかも、その内容は、部分改修や増築などの補足的工事のレベルとは言えない程の、城郭構造自体の根本的改変に相当する大規模工事が、いずれかの時期に実施されていた事実を明示するものであった。

佐賀県教育委員会による一九九二年の発掘調査で、現況の本丸を構成する石垣の裏側から、先行する「旧」本丸の高石垣の検出を見たことが、こうした全体構造の途上改変を知る決定的な発見となった。この埋没石垣ラインは、現存の本丸塁線よりも十五m〜二〇mほど内側に後退した位置を走行している。つまり、南北約一二〇m×東西約一三〇mの正方形を意識した平面プランの現存本丸が完成する以前に、南北約一一〇m×東西約一〇〇mのやや歪んだ台形プランを呈する、一回り小さな総石垣の本丸が形成されていたことが明らかになったのである<sup>(32)</sup>。この本丸拡張工事の実施の意味は、単にその敷地規模の拡大という局所的改造の次元に留まるものではない。当然、隣接する周囲の曲輪空間の面積削減を招いていたはずである。それと同時に、「旧」本丸塁線の折曲状態によって形成されていた虎口空間が埋没することで、城内の主要導線の変更をも余儀なくさせることとなり、結果的に城郭全域での改

造・拡大に連動することにもなりかねない。事実、同じ一九九二年に実施した大手口石垣修理に伴う発掘調査において、虎口空間を形成する櫓台自体が増築工事により付設されていたことを明示する、地下埋没の石垣が検出されており（図7中◎地点）、右の推測を裏付ける知見を得ている（前註32）。

以上のことから、名護屋城はわずか七年前後の利用期間にもかかわらず、段階的な拡張工事を経て徐々に肥大化し、その結果、現在確認できる十七万坪の城域が成立したものと結論付けられる。ただし、それは必ずしも当初計画を順守した経過ではなく、本丸の大改造に現れているように、築城途中での方針変更が生じたことを窺わせている。同時に、これだけの改造は、既に機能していた城下町との連結状態・位置関係にも何らかの変化を生じさせ、さらには、城下空間の発展過程にも一定の影響を及ぼしたことが考えられる。

## ② 城下の都市的興隆の具体相

名護屋に秀吉が到着し近畿以東の諸大名が参集した段階、既に城の周囲には、次掲の各史料が語っているように相当規模の町場が発生していた。

### 【史料8】フロイス『日本史』

「間もなく、実に夥しい家屋がそこに建てられたが、それらは、諸侯がその家臣たちとともに居住するためだけでなく、商人や、売店とか旅宿（を営む）人、またそれに類した（職の）人々も（住むための）ものであった。かくて真直ぐで立派な街路を備えた、非常に大きく美しい都市が出来上がった。」（第三十一章）

「この（名護屋城の建築）に従事した身分の高い武将たちは、おのおのが他（の武将）に劣るまいと努力した。…（中略）…それは（老

関白が同所に到着した時に、すでに完成した宮殿と城のみならず、既述のように直径一里以上もある新市街を彼に見てもらったためであった。」（第三十四章）

### 【史料9】「平塚状」

「町中、京・大坂・さかいのものと、ことごとく参つとい候間、何にてもそのもの候、就中、米こく、馬のはみなとは、山のこくとにて候、…（中略）…金銀さへ候ハ、人馬ともつ、かなく帰国可致候、…（中略）…遊山多候間、さひけんなき名酒共に候、京・大坂・さかいの酒とも二候」

### 【史料10】「大和田」

- a（小太同心二町見物する、吉隼も、たいこのかハ式枚、かたきぬ、袴、ちやわん、酒入、とんすのゑり、唐もんめんのはし、染付二枚所望する）（四月二十四日条）
- b「屋形サマナコヤ町御見物、御供申」（七月二十一日条）
- c「天然、カボチャト云国ヨリ御礼仕舟見物スル、進上之物ハクヂヤクノ尾五分、同生タルクヂヤク一疋、ザウノキバ其外種々アリト云」（七月十二日条）
- d「ナンバン仁ノ舟懸ル、三様御供シテ見物スル」（七月十四日条）
- e「ナンバン筒御所望有度トテ名護屋へ被遣、船中ニテ見ル、機二不入付帰、即申上ル」（八月七日条）

### 【史料11】『日本往還日記』万曆丙申八月二十九日（慶長元年「一五九六」）

閏七月二十九日 条<sup>(33)</sup>

「晩、至名護屋…（中略）…人居極稠盛、其市塵樓店、鱗次為村、非対馬一岐之比」

史料9、10―aにより、兵糧米や飼料といった渡海の必需品の集積のみならず、ひと通りの生活物資はもとより、かなりの多彩な嗜好品までもが流通する商業地の発生が理解できる。その景観は、多数の店舗が軒

を連ねた「町並み」と称するべき建物密集地区であつて（史料8、11）、  
「見物」にも耐えるだけの規模と繁栄を示した空間が展開していた（史料10— a、b）。

その活況の様子は、外国交易船の着岸によつて様々な珍奇な品（武器を含む）が到来し、国際社会の情報、習俗などが流入したことで、さらに殷賑を極めたものとなつたと考えられる。フロイス『日本史』第六十九章には、ルソン総督府やカンボジアからの使節団の入港、ポルトガル商船団総司令官ガスバル・ピント・ダ・ロシヤの名護屋城での秀吉への謁見などの記事が見られるが、史料10— c、d、eはそれらの各件に該当する。

また、同書・同章によれば、イエズス会徒・宣教師も頻繁に同地を訪れており、高山右近、小西行長らの招請を受けて大村から司祭が派遣されるなど、長期滞在による布教活動を数度にわたつて行つてゐる。前田玄以や徳川家康といった信者以外の在陣大名（それも政権の枢要にある人物だが）との歓談に及んだことまでが記されており、禁教令発令後のキリシタンの活動に対する、政権側の許容範囲の実情が見えるよう興味深い。

これらの史料から想像できる名護屋の相貌は、渡海に要する軍事物資の一中継点としての性格を超越して、単なる町場以上のまさしく「都市」——それも「国際都市」——と評価すべき内容を備えた風景であつたと言い得る。

その興隆の姿は、軍需景気の昂揚を当て込んだ諸商人の自主的参集が発端となつてゐるものと容易に推測できるが、その背景には、公権力の市場介入があつたことを次掲の史料が明示している。

【史料12】 天正二十年十一月朔日付・豊臣秀吉朱印状「〔浅野家文書〕二

六二」

「 覚

一、大坂よりなこやまでうんちんの事百石に付て、冬ハ拾五石、夏ハ拾石：（中略）：

一、肥後よりなこやまで百石に付て、拾三石たるへく候、右之旨、商人井船方共ニ申聞、御定のうんちんにて可相届事、：（中略）：

一、商船、諸役井御やとひの儀、一切不可有之候、但、ちんふねハ各別事、

一、博多にて売米のさうは、銀子拾枚二十八石かへ売買候へ共、公儀へハ銀子十枚ニ七拾七石替ニ、可被召上候、又なこやへ相付てハ、諸方よりの売米、銀子拾枚七十石かへに、いかほとも可被召上之条、諸商人共ニ、右之旨可申聞事、：（後略）：

この法度に明言しているように、名護屋を終着点に置いた各国からの兵糧米の輸送体系と運賃比率を公定するとともに、政権や各大名による「商船」の半強制的徴用を否定することで、海運業者の積極的関与を保障したのである。この施策により、かなりの数の海運業者がこの地に活動拠点を構えたものと推測できる。

さらには、第四条に見られる米相場場の操作は、商人の販売意欲を煽動したに相違ない。右の規定によれば、博多では公用購入価格を通常取引相場の三%高としてゐるが、名護屋ではさらにその一〇%高に、博多の一般市場価格と比較すれば実に十四%以上の高値で価格設定をした。念の入つたことに「いかほとも可被召上」しとして公儀の責任買入れを約束している点、他地方で安価で仕入れた米を大量に抱えた商人を、名護屋へ殺到せしめたことは想像に難くない。<sup>34</sup>これは、兎にも角にも同地での兵糧米確保を最優先した、軍事政策の一環としての性格を確かに持つものではあるが、安定的消費地の創出と価格統制による商業活動の保証によつて、商人の来住の促進をも意図した施策と見て良いだろう。

例えば、博多の豪商神谷宗湛は、秀吉を自邸で接待した際に、政権の

財務担当である長束正家も同席の上で「銀子何ホトナリトモ申上次第、可被成候、御借候間、ナコヤニテモ商仕候ヘトノ」上意を受けている。<sup>(35)</sup>ここに、秀吉自身の口から発せられた、あからさまな商人誘致の姿勢を見ることができるのである。

ところで、この城下の社会構造を考えた際、これだけの規模の町場が突如として発生した事情からすれば、自律的な都市共同体が成長するまでの時間的余裕があったかどうか、懐疑的にならざるを得ない。それゆえに、都市生活上の一定の混乱を予測して、公権力側から何らかの秩序維持のための措置が取られたはずである。しかし、都市的成熟度の判断の手掛かりともなる「町掟」・法度に類する史料や、町場建設時の具体的統制策等については、この城下に対して発布された明確な事例を、現時点では把握できていない。管見の限り、文化年間（二八〇四～一八）に纂集された『松浦拾風土記』<sup>(36)</sup>卷一の中に、名護屋を抱える東松浦郡の知行主であった波多親に宛てたとされる「秀吉公名護屋御在陣の節の御定」と題する制札の写らしき一文が収載されているのを知のみである。これは、原典が不明である上に、文言にも不可解な部分もあって、何よりも日付を「文禄元年正月」（改元は十二月八日）と記すなど、当然のことながら鵠呑みにできるものではない。その反面、看過できない内容も含まれているため、参考までに触れておきたい。

これには、①百姓・町人に対する非分申懸の禁止、②名護屋への諸人往還に供するための木賃宿設置とその宿代の規定（一人一文、馬一疋二文宛取）、③「糠、藁、薪、草履、以下一切不出事」との条文が掲げられている。①と②は、大坂築城に際して普請従事者と住民との間のトラブルを回避すべく、禁制を含む各種法的措置が取られたのと同様の主旨の配慮とも取れる。③についても、軍用物資でもある燃料や馬の飼料等をめぐる兵卒の押買行為を停止する意図がある一方で、それらの公的確保を目的とした勝手入手の制限措置とも解釈できよう。

なお、天正二十年正月に発せられた秀吉禁制には「薪、ぬか、わら、そうし以下、亭主にあひことハリ可取事」との近似した条文が認められる他、小瀬甫庵『太閤記』卷十三の「就高麗陣掟条々（年未詳）」<sup>(39)</sup>にも「薪秣等之代は、宿主と相対し出し可申候事」との規定が見られる。また、②の「一宿木賃」代が「一人一文」という規定についてだが、『大和田』八月十四日条に記される、佐竹軍帰国に備えて先発した奉公人が支給された「四十文、二人廿日ノ木ちん分」という経費の積算基準と合致している。

これらの他史料から比較すると、この波多氏宛「御定」の原型となるような制札が、実際に名護屋にも発令されていた蓋然性を、完全には否定できないと考える。より確実な史料に従えば、大坂（名護屋間の街道沿いの主な宿・町に発布された次掲の軍令の適用範疇に、法制上はこの城下も置かれていたものと見るべきかもしれない。

【史料14】豊臣秀吉掟書「小早川家文書」一一五〇五

「掟

今度大明國御動座に付て、國々海道筋、其外軍勢陳取之在々地下人百姓等、家を明於令散者可為曲事、宿々町なミ、如有来商売可仕、自然陳取往還諸人、或押買押売、或乱暴狼籍輩、可為一錢切、其外猥儀於有之者、如御法度可被加御謙罰者也

天正廿年正月五日（秀吉朱印）

ただし、全国の武家奉公人の参集と、近在農民の夫役徴発あるいは日用稼ぎによって、爆発的な人口増加を招いた<sup>(40)</sup>この地の現実からすれば、この基本法規に加えて、前掲「御定」のような個別規制が別途に講じられていたのではないだろうか。特に、治安維持のための強制的措置が必要となったであろうことは、『大和田』に散見できる次掲のような乱暴行為の勃発の記事からも想像できる。

【史料15】『大和田』

a 「つぢ切仕者アリトテ多衆ニテ寺沢殿之表之小屋取まく、時を移  
ス、内に其人ナクテ皆もとる」(七月四日条)

b 「北郷殿へ馬之札ニ参、はた物見物する」(六月九日条)

c 「江戸崎之者火アブリニ被行」(七月十四日条)

d 「牛コロシ御センサクニ付、刑左使コス」(七月二十二日条)

e 「牛コロシ二人ハタ物ニ上ル」(七月二十三日条)

藤木久志氏が言うところの慶長二年三月「悪党停止令」は、主に武家奉公人を警戒対象としていたとされるが、aに見られる「つぢ切」の主犯の場合も、寺沢広高軍の構成員であったものと文脈から理解できる。「侍、中間、小者、あらし子尔至迄、当月中二なこやへ可参陣」<sup>(43)</sup>との方針に従って、乱暴人「予備軍」とも言える全国各地の傭兵たちが集結させられた以上、この地の治安悪化は不可避であった。「町」生活者の安全保障を目的とした措置——参集大名方にとっては軍律遵守の一環かもしれないが——が急務となっていたことを、右の実態が裏付けている。

a 文中に見える「多衆」が、そのための治安部隊の存在を示すものかどうか定かではないが、dの「牛コロシ」詮索に際して大谷義継配下が捜査を行っている点は注目すべきである。義継は増田長盛、石田三成らとともに朝鮮奉行として戦地での監察を担当しているが、彼らの職責は、名護屋在陣の兵卒に対する軍規監督までもを兼務するものであったかもしれない。

b、cの処刑事例は、佐竹家中の問題なのか、政権側による陣地逃亡者等の摘発の結果か、乱暴行為の懲罰を示した例なのか峻別がつかない。しかし、義継が詮議した「牛コロシ」の処断がeに見えていることからすると、これらの頻繁な刑罰執行の事実を通して、奉行を任じた何らかの検断組織が機能していたことが想定できるものと思う。

以上、これまで見てきたように、全国からこの地に参集したあらゆる社会階層の諸人の目を通して、名護屋城下に発生した「集落」は、

明らかに「町」として認知されていたことが確認できる。しかも、それは、「町の如き」でも「町に近い」でもなかった。形容的表現ではなく、質的にも外観上でも巨大な「町(都市)」と見なされていたことが最も重要である。

それでは、その内部構造についても、確かに都市としてのプランになり得るような空間構成にあったのであろうか。次からは、その具体的な内容を探っていききたい。

### ③ 空間復元のための基礎的史料の吟味

この城下の空間構造の内容を考察するには、現時点では考古学分野での情報の蓄積が十分ではないため、確実かつ決定的な検討材料に不足している。従って、地名、地籍図、伝承、江戸時代の地誌類といった諸種の参考資料の相互比較により、専ら歴史地理学上の方法論に依拠した遡及作業を重ねていくよりない。

その検証材料となる資料の中に、特に重視すべき幾つかの絵図・絵画が伝世しており、この復元的考察の基礎的史料としたいと思う。そこで、本論にも与えられている「中世都市の調査・分析方法に関する研究」という共通課題を踏まえる意味でも、ここで利用しようとしている各資料の性格と効用、あるいはその限界などを確認することで、都市構造の分析のための「史料化」の手続きを図っておきたい。そのため、論展開の上で多少回りくどくなるのを承知の上では、ある程度の紙数をこの場で費やそうと思う。

#### (1) 諸大名「配陣図」

現況では住宅地と耕地とが混在している城下一帯だが、昭和初期までは、旧「名古屋村」の中心地があった湾岸と城跡の濠端に集落が点在し



図1 名護屋周辺地形図(図中の数字は陣跡の所在地を示す)

《本論中で触れた主要な大名陣跡》

- |          |          |         |           |         |
|----------|----------|---------|-----------|---------|
| ①堀秀治陣跡   | ②細川忠興陣跡  | ③豊臣秀保陣跡 | ④鍋島直茂陣跡   | ⑤加藤清正陣跡 |
| ⑥佐竹義宣陣跡  | ⑦石田三成陣跡  | ⑧大谷善継陣跡 | ⑨上杉景勝陣跡   | ⑩増田長盛陣跡 |
| ⑪宇都宮国綱陣跡 | ⑫徳川家康別陣跡 | ⑬前田利家陣跡 | ⑭伊達政宗陣跡   | ⑮結城秀康陣跡 |
| ⑯徳川家康本陣跡 | ⑰片桐且元陣跡  | ⑱片桐貞隆陣跡 | ⑲木村重隆陣跡   | ⑳木下勝俊陣跡 |
| ㉑福島正則陣跡  | ㉒宇喜多秀家陣跡 | ㉓毛利輝元陣跡 | ㉔長宗我部元親陣跡 |         |

※ 陣跡分布状況については、「配陣図」、伝承(含・呼称地名)、遺構の有無と特徴などに基づいて、1978年3月に佐賀県教育委員会が『名護屋城跡並びに陣跡保存整備計画策定書』中にまとめた分布調査結果に従っている。





図2 城下町関連呼称地名分布図(網掛けのエリアは、標高40m以下の地区)



写真1 昭和初期頃の名護屋城下—東出丸より「殿町」～「茜屋町」を遠望—  
〔『歴史寫眞』218号 歴史寫眞會 1931 より転載〕

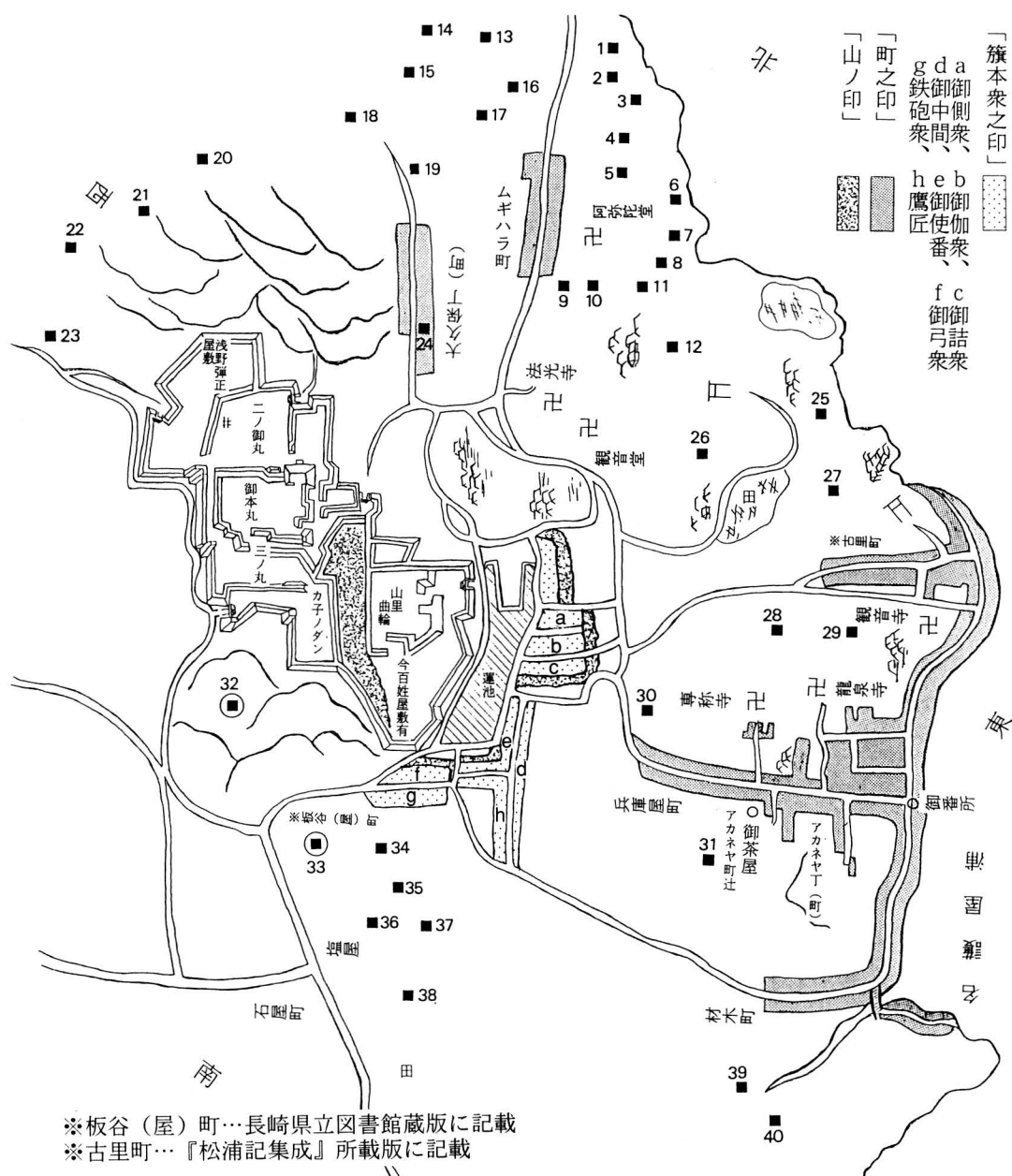
たのみで、大半は畑地が広がる田園風景にあった（写真1）。その耕地の中に多くの町関連地名が分布しており、これにより、かつての城下域のおおまかな範囲を絞り込むことができる。

図2は、その主な地名を現況地形図上に落としたものだが、城の北東側から東側一帯にかけてのエリアでの町名分布が顕著であり、特に、海に向かう道筋や海岸線沿いに集中している様子が見て取れる。

この残存地名の数だけでも、相当規模の城下空間の展開を想像させるに十分だが、合わせて参考となるのが、城を中心に諸将の陣所配置状況を図化した「名護屋古城図」、「陣所図」などと称される一群の絵図である。これには諸大名陣所の位置の他に、秀吉直属軍の屋敷地区と町場の範囲や周辺幹道の走行などが記載されており、現段階では全国で約四〇点の同種の絵図が確認されている（製作の趣意が陣所の配置状況の解説にあると見なせることから、本論では仮にこれらを「配陣図」と総称しておく）。ただし、そのいずれもが江戸後期以降の写である上に、原版の所在と成立年代が不詳であるため、史料操作の際の遡及限界を踏まえるべきことは勿論である。しかし、これに記載されている情報内容を仔細に見ていくと、地形の概況、城跡内部の遺構配置、陣関連遺跡の残存・分布状況、残存地名などの点で、現地の実態との高い整合性が指摘できる。幹道の走行状態についても、明治十四年（一八八二）に旧長崎縣が調整した「東松浦町村図・乙—名古屋村図」（佐賀県立図書館蔵）の内容とほぼ一致している。これらのことは、この絵図が、戦役の規模の大きさを語ることを目的に製作された単なる想像図ではなく、周囲の地勢環境を総合的に網羅した絵地図の類としての性格を合わせ持つことを示している。

『伊能忠敬測量日記』<sup>(45)</sup>には「名古屋村城山遠見番所④印より初、左右（本城）太閤御陣所石垣、右浅野彈正陣所、西御門の跡を出て、左堀久太郎陣所、右二町程小山の上に細川幽斉陣屋、左道端に大和納言陣所蜂畑（忠興）という。左道端に鍋島加賀守陣所高岳（直茂）という。左十町斗加藤主計頭陣所（清正）字大平（清正）という」（文化九年（一八一二）八月二十九日条）との記述がある。図1は、佐賀県教育委員会が陣跡の残存遺構の悉皆踏査を実施した上で、一九七八年にまとめた陣所分布地図だが、各陣主の比定は「配陣図」に拠っている。これと照合すると、右の記述内容が、「同図」中に描かれる城の西側一帯の陣所分布と、ほぼ完全に一致することが確認できる。





大名陣屋（■）の注記陣主名一覧（鍋島報効会蔵『名護屋古城之図』中注記より）

番号	記載陣主名	番号	記載陣主名	番号	記載陣主名	番号	記載陣主名
1	氏家志摩	12	寺西志摩守	24	御牧勤兵衛		（長・他…加賀筑前守）
2	氏家内膳正	13	羽柴三好侍従	25	富田左近将監	34	郡上侍従
3	室町内府公	14	秋田太郎	26	大野修理大夫	35	粕谷内膳正
4	真田安房守	15	九鬼大隅守	27	本田平八	36	仙石権兵衛
5	伊藤長門守	16	岐阜少将	28	大納言家康公	37	新庄新三郎
6	蒲生飛騨守	17	芦浦観音寺	29	大久保七郎右衛門	38	羽柴左近
7	加藤出羽守 （松…加藤左馬介）	18	羽柴小早川侍従	30	名古屋越前守		（補注「土佐侍従カ」）
8	長束大蔵大夫	19	蒔田権之助	31	羽柴半助殿屋敷	39	羽柴宮内殿
9	北条美濃守	20	清田角兵衛	32	陣主名記載なし （松…木下右兵衛門督）	40	山崎左馬允
10	村上周防守	21	片桐主膳正	33	記載なし （松…陣表示のみ）		（松…『松浦記集成』版注 記、長…長崎県立図書館蔵 版注記）
11	山内吉内	22	片桐東市正				
		23	館野侍従				

図3 「配陣図」（城下町周辺）

鍋島報効会蔵「名護屋古城之図」をベースとし、長崎県立図書館蔵「肥前唐津名護屋城御城并陣所之図」、佐賀県立名護屋城博物館蔵「肥前名護屋城諸侯陣跡之図」、等の情報を付加して作成

〔図1中の①～⑤陣跡〕。つまり、この「配陣図」は、机上の創作絵画ではなく、江戸後期の時点で現地に残っていた陣跡伝承地を収載した絵図であるものと理解できる。また、数種の絵図の中には「今百姓屋敷有」「御厩之跡」といった注釈や、藩政期に設置された「御茶屋」「御番所」の表示を持つものがある。絵図書写段階（もしくは原典の製作段階）での「名古屋村」の様子を加筆していることは疑いなく、江戸期の一定時期の旧城下の情報を、相当に綿密な現地踏査・伝承聴取に基づいて図化したものと見てよい。従って、現在では滅失してしまった景観や地域の記憶情報を採集する限りにおいては、極めて有用な資料であるとの評価が与えられるだろう。

そして、これらの情報自体は、当該期にまで十分遡及できる可能性を持つことが重要である。「平塚状」の一節には、「屋形様御陳場ハ、にしのみきはにて候<sup>(佐竹義重)</sup>」(中略)「御とうちんのうしろのかたのみねニハ、石田殿御本陣にて候、一人す、しき地形に候、前の方のみねニハ、大谷殿御ちんに候、其前ニハ景勝之御陳二候、それより引きつつき、ました殿をはしめ、ほうしう衆、くにつな殿御陳取にて候」といったように、佐竹陣所近隣の他家陣所の配置状況が記されている。これを「配陣図」の内容に照合してみると、大谷、石田、里見の各陣の位置については検討すべき点があるものの、上杉、宇都宮、増田の各陣と佐竹陣との近接配置に関しては合致していることが確認できるのである(図1⑥、⑨～⑪の各陣跡)。

また、『伊達日記』<sup>(47)</sup>下には「家康公、筑前殿モ御城ノ北入海ヲ隔御立陣二候、政宗モ其北方御陣所二候、其西ハ結城殿後陣所二候」とあり、「配陣図」にも、名護屋浦を挟んで城と対峙する海岸段丘上に徳川家康別陣、伊達陣、結城秀康陣が記載されている(図1中⑦、⑫、⑭陣跡)。前田利家陣については「家康、筑前御陣所遠候由、秀吉公御意被成、御城近所へ御陣所相移サレ候」との記事に符合するように、城の東隣の

「筑前町」と称する町場の脇に置かれており、家康本陣も城下に接する位置に記されている(図1中⑬、⑯陣跡。および図3中28、33)。

以上、これらの史料からの検証により、「配陣図」の記載情報の下地となっている江戸期の伝承・地名は、全てではないにせよ文禄・慶長期の実情をかなり忠実に踏襲したものであることが推測できる。加えて、これまでの発掘調査において、堀、細川、豊臣、鍋島、伊達、徳川、前田ら右掲の陣跡で、ことごとく当該期の遺構が検出されている事実が、同図の信憑性を裏付けている。

なお、この一連の絵図は全体構図や記載内容がほぼ同じで、恐らくは転写の過程で生じた若干の異同がある程度なので、本論では、各絵図の中でも伝来が確かで、幾つかの系統版の原典ともなっている鍋島家伝存の「名護屋古城之図」(嘉永元年(一八四八)書写・鍋島報効会所蔵)をテキストとした。その上で、同図には記載がなく他版にのみ注記される事象を補足記入した修正図(城下周辺のみ)を作成し掲げている(図3)。

## (2) 町場地名・伝承地の起源をめぐって

次に、この「配陣図」中の記載や呼称地名に現れている町場の成立時期が肝心の問題である。はたして名護屋城期の町区を示すものなのかどうか。

町場に限らずこれらの地名は、享保年間(一七一六～一七三六)成立の『鍋島直茂公譜』<sup>(48)</sup>にある「奈古屋陣場之次第」に列記される地名と一致している。記事の性格が諸大名陣所の所在地名の書立であるため、町場の全部は記されていないものと思われるが、その中の「板屋町」、「石屋町」、「カ子町<sup>(海士)</sup>」、「監屋<sup>(堀)</sup>(町)」などの町区地名の発生は、当然この時期以前に潮るものと見なければならぬ。

また、享保二年(一七一七)の幕府巡見使の案内役となった同村大庄屋名古屋安兵衛の覚書には、「少シ高く見へ申候所、家康様御陳所跡ニ

而御座候旨申上候得ハ、爰にても御乗物被留、しはし御覽被遊候」、「無程、町にさかり被遊候所ニ、御意ハ、此町ハ太閤様御在城之節、御用承諸商人等差置候阿か年町かと御意、私申上候ハ、其ハあれニ而、今ニ阿か年町と申伝候旨申上候（傍線筆者）」との問答が記されており、徳川家康本陣跡隣地の「阿か年町（茜屋町）」が、名護屋城下の中心的商人町の一つとして記憶されていたことが分かる。

では、これらの江戸中期以前にまで遡及できる町場が、伊丹在郷町や播磨三木の例にも見られるように、名護屋廃城後の地域発展の過程で成立し得る環境下にあったかどうか、念のため検討しておく必要があるだろう。

唐津藩政下の旧名護屋城下地区での人口動態だが、『松浦拾風土記』卷三之下に所収される文化年間頃の「唐津領惣寄高」には、「海士分家」を加えて家数五二三軒・人数二、二五一人とある。文化十五年（一八一七）の「肥前国松浦郡名古屋組指出張」には四九九世帯・二、一四六人と記載され、江戸期以降ではこの頃が最も高人口を抱えた時期と見なされる（因みに現在は、世帯数四〇〇、人口約一、二〇〇人）。しかし、その中の商工層世帯は、後者の指出によれば職工八（大工四、船大工二、木挽一、鍛冶一、桶作一）、商家十五（紺屋七、豆腐屋三、糶屋一、酒屋四）、医師一を数えるにすぎず、世帯総数の五%にも満たない。

一方で同地は、寛政五年（一七九三）に作成された唐津領内三〇箇所の浦・島の「船数書出」の中でも、七四隻の船が所属する藩内第六位の港に数えられており、かつての軍港機能を継承した港湾集落としての姿が垣間見え、必ずしも零細農村というレベルにまで衰退したものではなかったと思われる点に注意を要する。とは言え、域跡の周囲に十数町区もの町場を抱えた広域集落ではないことは、右の人口構成から見ても明らかである。

以上のことからすると、江戸中期に記憶されていた多数の町場地名は、

幕藩体制下で新出したものではなく、およそ豊臣期の都市的興隆の残像であるものと見なすのが素直であろう。さらに、その直接的証左は『大和田』の七月八日条に見ることができ、所用で「ナコヤ迄カチにて同心」した大和田重清が帰途に「芳賀殿ニ麦わら町にて懸御目」かったとある。これにより「配陣図」および呼称地名にある「ムギハラ町」・「麦原町」の实在は疑うべくもなく、これらの町場地名の史料価値が裏付けられる。

### （3）『肥前名護屋図』屏風

残存地名と「配陣図」に加えて、この城下空間の三次元的な復元考察を試みる上で不可欠な資料が、現在、佐賀県立名護屋城博物館が所蔵する『肥前名護屋図』屏風である（写真10、11。以下、本論中では『屏風』と略す）。この屏風絵に関しては、かつて榑崎宗重氏が美術史上の観点から、狩野家の惣領にして秀吉の御用絵師であった狩野光信の作である可能性の高さを論じ、内藤晶氏が建築史学の立場から、描かれている建築物の高い写実性を評価すると同時に「建築史を敷衍した都市史のフィジカルな研究史料」としての重要性を指摘していた（前註8論文）。その伝世過程や発見の経緯については榑崎氏の考察に詳しいが、「名護屋図板倉」との端裏書や『徳川実紀』等の記述から、伊勢亀山藩主板倉重常が元禄元年（一六八八）三月に將軍家に献上した「肥前名護屋圖屏風」に該当する可能性が強いとされ、現存する『屏風』はその下絵もしくは写と考えられている。

この絵画は、全体構図と描写内容から見て、まさしく名護屋城下町を中心的題材とした「都市景觀図」の範疇に含められるべき作品であって、画面中段の大部分を城下町の広がり様子が占めており、名護屋城自体は三々四扇目の上段に置かれて、ある種の借景の呈をなす。下段では数艘の安宅船が停泊する名護屋浦の描写に力点が置かれ、臨海型城下町と

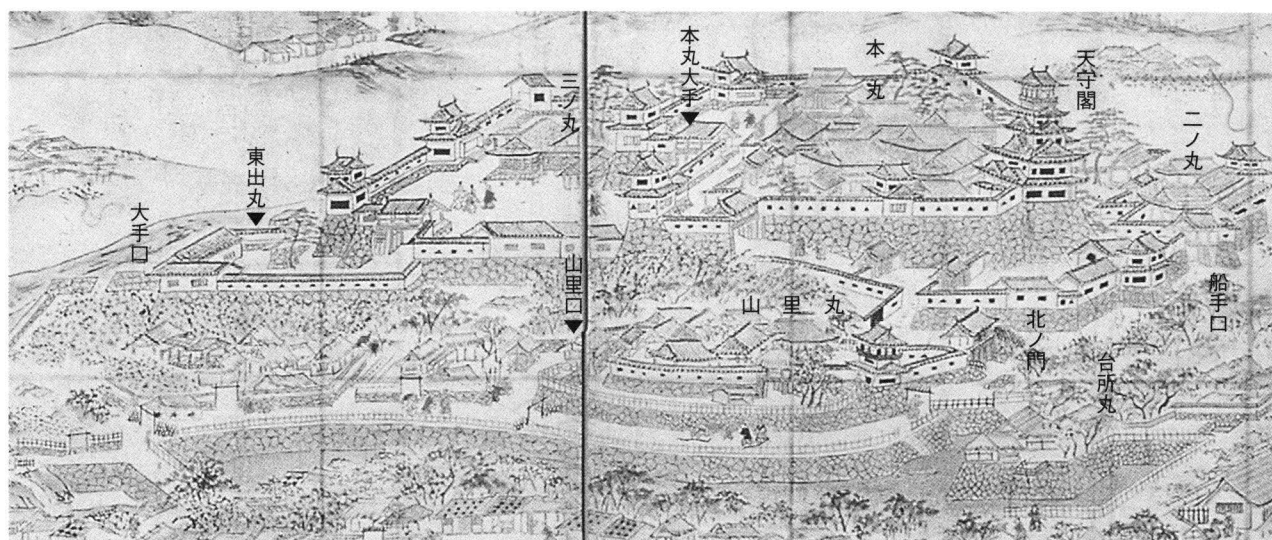


写真2 『肥前名護屋図』屏風(部分)・名護屋城



写真4 『前同』徳川家康別陣



写真3 『前同』豊臣秀保陣跡



写真5 『前同』大陸官人行列の場面(「塩屋町」～「平野町」付近か)

写真提供：佐賀県立名護屋城博物館(以下同)

しての景観上の特徴が強調されている。ちょうど同港の北東海上から遠望した際の視界を中心的な構図に据えて、実際には同時の俯瞰が不可能な南北方向の風景の広がりをも同一画面に凝縮しつつ、鳥瞰図法の駆使により、城内や城下の町割の具体的な形態についての詳細かつパノラミックな表現に成功している。

ただし、描きこまれている各施設の全てが実態描写ではないことは、当然のごとく予測されることである。絵画史料を用いた景観復元作業に臨む際の基本的姿勢として、個々のディテールについては、都市的繁栄の類型的表現と見なして読解すべきことは言うまでもない。現に、登場人物の数にしても、一連の『洛中洛外図』（上杉家本『同図』で二、四八五人）<sup>(55)</sup>や『江戸図』屏風（約五千人）<sup>(56)</sup>に比較すると極端に少なく、二五〇人にも満たない上、各人の表情は簡略化され点景の域を出ていない。その意味においては、都市風俗の活写はこの『屏風』の主要なテーマに入っておらず、登場人物の半数近くが武家ないしその奉公人であることからしても、軍事基地としての景色の再現を念頭に置いた作品であると考えられる。

しかし、一九八六年から開始された特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」の保存整備に係る発掘調査によって、『屏風』の描写内容と検出遺構との整合性が、次第に証明されてきたのであった。

豊臣秀保陣跡では、『屏風』に描かれている陣所（写真3）と同型式の、外柵形を備えた方形プラン・総石垣造りの中心郭の存在が明確となり、描写されている施設と類同した数寄屋や瓦葺櫓跡などに比定できる礎石建物群が検出されている。<sup>(57)</sup>

対するに、石塁や瓦葺屋根の施設などが一切描かれていない徳川家康別陣跡（写真4）は、長屋様式の掘立柱建物跡を主屋とし、主に土塁と空堀によって形成された陣であることが判明している。<sup>(58)</sup> 豊臣秀保陣跡と相違して、こちらでは瓦は一片も出土していない。

名護屋城内の描写（写真2）に関しては、各曲輪の配置や平面形状に加えて、櫓台、虎口の位置と形態までもが残存遺構の様態に一致するのみならず、山里口では四脚門跡（一九八九年調査）<sup>(59)</sup>が、東出丸で多聞櫓跡が（同）、本丸大手では櫓門跡（一九九三年調査）<sup>(60)</sup>が、それぞれ『屏風』中の描写施設の位置と全く同じ地点で検出されている。

こうした埋没遺構の実態との符合は極めて重要であり、『屏風』の成立年代は、文禄・慶長期から大きく時間的経過を隔てた段階ではなく、むしろ機能時の城内の細部を実見している絵師の手によるものと考えねばならない。作風による特徴を待つまでもなく、城内の各御殿の襖絵を手掛けた形跡がある狩野光信の作という可能性は、確かに高いと言える。

その成立の直接的動機を語る史料は皆無だが、第五扇から六扇にかけて描かれている大陸官人の行列が重要なサインとなる（写真5）。これは、名護屋で行われた文禄二年（一五九三）五月の日明和議交渉の際の、講和団到着に時間軸を設定していることを示すと見られ、その記録化が製作目的の一つであったものと容易に推測できる。素描とも言うべき他の登場人物に比べて、この行列と見物の群衆の表現に相当のウェイトが置かれていることは、その場に描かれている人物数の多さにも端的に現れている。また、城の本丸・三ノ丸に衣冠束帯姿の人物が点在しているのは、城中が使節応対のための礼式の備えにあることを表現しているものと捉えられ、『屏風』全体の主要なモチーフが、この象徴的な場面に求められることは明白である。そうなると、城郭内部の詳細な図化―本来、軍事機密に触れたはずだが―という点をも合わせて重視すれば、秀吉自身かその周囲の意志が、製作に直接的に作用していることも考えられなくはない。

これらのことから、この『屏風』は名護屋城存続時期の景観年代を備えているだけでなく、先学の主張の通り、限りなく当該期に近い製作年代が与えられて然るべき絵画史料と見なせるわけで、結局、この都市構



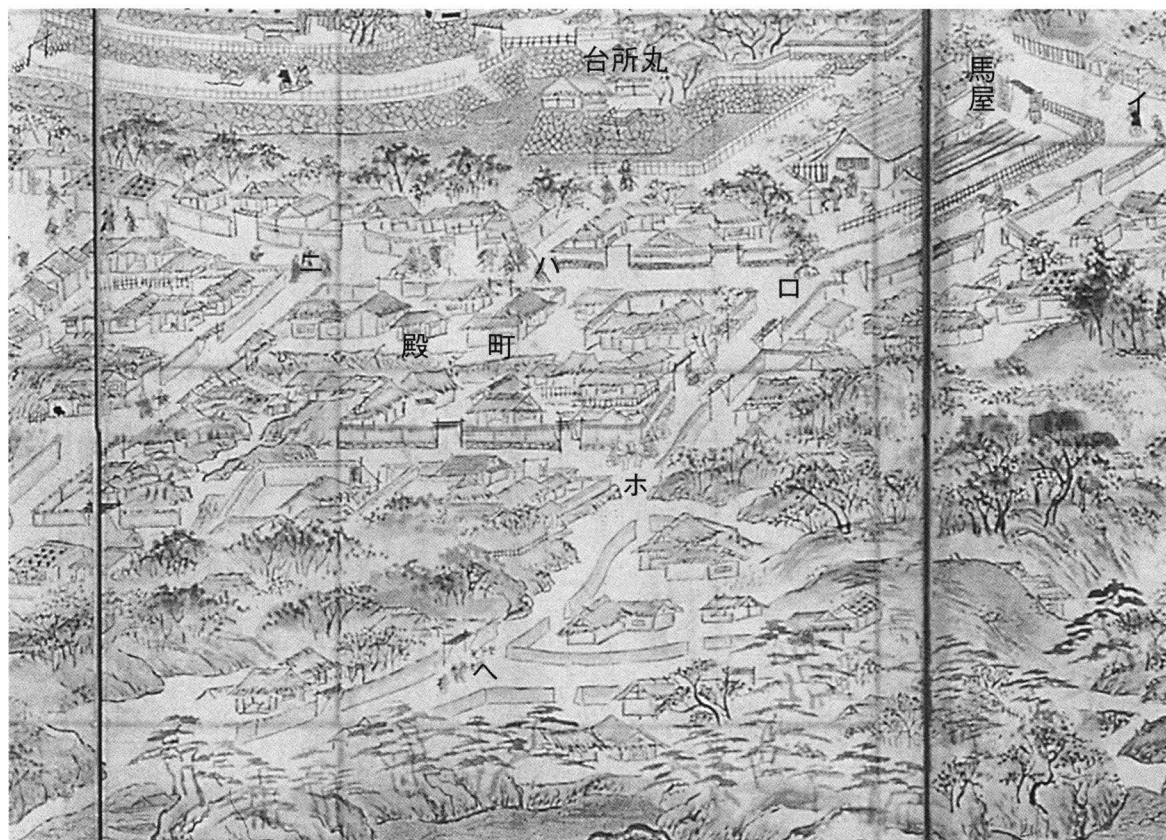


写真6『肥前名護屋図』屏風(部分)・武家屋敷地区(イ～へは、図4中の同記号の位置に比定できる。)

造の立体的復元に当たつての基礎的史料として、活用に十分耐えられるものと判断できる。

#### ④ 城下町の構成要素と内容

これまで検討してきた各史料の有効性を踏まえた上で、名護屋城下町の構成内容を、改めて見ていくこととしよう。

なお、『屏風』に描かれている地形起伏や街路の走向が、現況の城下地区の実情に符合することは、いち早く内藤氏が位置比定を試みつつ論証しており、大いに参考となる<sup>⑥</sup>。ただし、氏が提示した復元案は城下地区のみに範囲を限定したのではなく、半島全体を対象に据えた比較的地イナミックスなものであるため、空間細部の議論に活用するにはどうしても難がある。そのため、ここでは『屏風』と『配陣図』との対比に加えて、旧地籍図、明治十四年製「東松浦町村図」との照合を行い、その広がりを見況地形上に復元した図4を用意した。

##### (1) 武家屋敷地区

「配陣図」中で、秀吉の「旗本衆」屋敷として表示されているこの地区は、城山北方から東方向に派生する尾根状の丘陵地形上に位置し、現在の字「池之端」、「畑ケ中」地区に該当する。現地ではこの地区を「殿町」と総称するとともに、「御小姓ヤシキ」や「御側衆ヤシキ」といった秀吉直属の家臣団の在住地区として伝承している。前掲の享保二年の名古屋村庄屋覚書には「夫過、殿町ニ罷出申候得ハ、吉武九郎兵衛様、所之氏神天神道ニ御出御座候ニ付」との記述があることから、江戸中期頃までは、天神社参道が分岐するこの界隈を確かに「殿町」と呼称していたことが理解できる。

明治二十年(一八八七)調整のこの地区の地籍図(図5)を見ると、丘陵地形のほぼ中央を縦貫する長さ四〇〇m程の直線道に沿って、やや歪んだ方画地割の畑地が連続している様子がわかる。この直線道の各所

図4 名護屋城下町要図

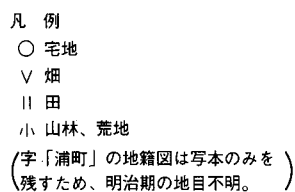


図5 名護屋城下町旧地籍図(太字は小字名)



では、小路の発達を暗示するように「食い違い」の交差点を形作る数条の分岐支道が派生しており、東西に長い狭長な丘陵上の空間を細分割している。

街区の展開を想像させるようなこうした地割の特徴は、『屏風』中の同地区に該当する部分の描写内容(写真6)に、より鮮明に現れており、そこには築地ないし練堀に囲まれた平面方形ブロックの建物密集地が連続する様子が描かれている。各ブロック内部の建物は、草葺葺屋根の簡素なものが大半だが、町家の景観が切妻屋根構造の建物を主流に表現されているのとは相違して、入母屋屋根の建物が非常に多く、町場地区に多く見られる石置板葺屋根のものは皆無である。敷地を囲繞している堀覆こそ草葺が主流ながら、腰回りに石垣を用いた堅固な造作を示すものもある。そして、通りに面する位置には冠木門を備え、門脇には槍を携えた武家奉公人らしき番兵の点景もあるなど、士分の居住施設であることを強調した表現で統一されている。

この屋敷地区は、城の外濠に相当する「鯉池」(配陣図)には「蓮池」と記す)の北岸に張り付くように東西に長く延びており、城の北辺全体を遮蔽するような状態で展開しているが、史料上にも城との近接状態を示す記述が認められる。「平塚状」には「御城きわニハ御小姓衆、或ハ五百・六百、或ハ千・二千つ、つれられ候人々取つ、けられ候」との具体的な説明があって、城の縁辺に秀吉の直属軍団が小単位編成で駐留していたことを裏付けている。

それと同時にこの記述は、各屋敷の敷地規模にも何らかのランク分けがあったことを暗示している。「殿町」地区の方面地割を見ると三五〇m<sup>2</sup>〜一〇〇〇m<sup>2</sup>前後の地筆が連続するのに対して(図5中●印の筆)、「鯉池」に面したエリアでは三〇〇m<sup>2</sup>未満の小規模な地割の分布が認められる(図5中▲印の筆)。後者のエリアは、「殿町」が展開する尾根地形の中腹に当たる緩傾斜地に該当し、濠端の狭長な余剰地を占有して

いる。そうした地形的制約により生じた敷地面積の格差とも解釈できるが、「平塚状」の記述を積極的に捉えれば、構成員数を異にした軍団組織の分駐に起因する、武家地内の細分化の形を残している可能性が高い。

しかし、濠端に分布する屋敷地の面積は、自立した武家階層の生活空間としては余りに狭小に過ぎる。<sup>(62)</sup> 豊臣後期大坂城下町の推定「佐竹氏邸」で見つかった、足軽長屋群(前註1 鋤柄氏論文)の建物面積と、ほぼ同規模の敷地(八〇〜一〇〇m<sup>2</sup>)さえあって、その点で『屏風』に描かれている景観内容とのギャップをぬぐいきれない。その実態とは、江戸の大名屋敷に付随する「表長屋」の機能に近似した、低層武士を主体とする居住区(厳密には屋敷地ではなく建物敷地の連続帯に近いか)として見なすべきかもしれない。

なお、名護屋城博物館により一九九四年に実施された同地区の一画での試掘調査では、濠の走行軸に沿う推定幅員三m以上の玉砂利敷道路跡を発見しており、濠岸での街路設定を証明する結果を得ている(図5中◎地点)。

この敷地面積上の格差を伴う屋敷群とは別に、さらに上層クラスの、豊臣直臣を主体とする居住区も、このエリアには混在していたことが窺える。博多宮崎宮座主の家人であった城戸清種は、座主坊使者として天正二十年七月に名護屋に赴いた際の見聞を『豊前覚書』<sup>(63)</sup>に記しているが、石田正澄屋敷に逗留した後、同月七日の早朝、三上季直(秀吉使番)屋敷での茶会に赴く秀吉を、「山里の御おり口ニ、進上物そろへ」待機したとある。正澄の申次で秀吉の前に伺候した清種は「かたひらとらせ候へ」との上意を受け、そのまま正澄の被官の案内によって「御たい所へ同心仕、かう蔵主様へ申候て、帷一重うけ取候て」、その後「木工介殿まで帰り申候」と記している。これによって、山里丸や台所丸との至近距離に石田、三上ら側近衆の屋敷があったものと知れる。「鯉池」の

北東岸には、「殿町」地区から派生した小尾根が、切通し状の小路の走行に分断されて、数箇所の小丘陵に分立したエリアがある(図4中・濃い網掛け部)。「殿町」地区のような明確な方面地割こそ観察できないものの、濠を隔てて山里丸と対峙する高所に位置し、一部では土塁の走行も認められることなどから、これも屋敷地区を構成する要素と見ることができる。「殿町」屋敷地の三〇五倍前後の平地面積を持つことからしても、『豊前覚書』にある秀吉側近の屋敷地に比定できるものと考えられる。一九九九年にこのエリアの最東端で、宅地開発に伴う発掘調査が鎮西町教育委員会により実施されたが、その結果、柵に区切られた3〜4棟の掘立柱建物跡などが検出され、生活施設の存在が確定的となっている<sup>(64)</sup>。

以上のように、名護屋城の北側一帯には、メイン・ストリートと濠の走行軸に規定された、平面形状の大小二種類の屋敷地から構成される武家居住地区と、小丘陵上にあつて半独立的立地を示す大型の屋敷地とが密集していたと見られるのである。

ところで、『屏風』中の武家屋敷地区の最右端には、他の屋敷には見られない大型建物群を持ち、柵に囲繞された平面長方形のブロックが描写されている(写真6右上)。その主屋は檜皮葺と思しい切妻屋根で、相当の屋根高を持つ大長屋として表現されており、隣には同じ屋根構造のやや小さめの長屋がある。共に切妻の破風板下には懸魚らしき表現が加えられ、城下の他の建物には無い装飾性が付加されている。その性格だが、大長屋の連子窓の下に馬が繋かれ、石垣造りの敷地の前通りには疾走する騎乗の侍が描かれるなど、この施設が馬屋としての機能を持つことの説明が付加されている。また、敷地の裏手には「饒鉢池」西端の風景が描かれているが、この濠端の一角を現地では「ババンタメ(馬場溜)」、「バンバ(馬場)」といった遺称で限定的に指呼しており、ここでも『屏風』の描写情報と呼称地名、実景観との整合性が改めて確認でき

る。

つまり、ここに描写されている建築規模や様式の格付けから見ると、この馬屋は特定家臣の屋敷地に付属する施設ではなく、広義の城域の一部位であることを意味するものと解釈できる。そうなるとその所在地点は、城下の空間区分上、極めて重要なランド・マークに該当することになる。「殿町」地区を縦貫する通りは、この敷地の角を南折した後、台所丸の脇を通過して城の「北ノ門」まで到達している(図4)。要するに、屋敷地区の中でも、最も城域に近い地点にこの馬屋が描かれているわけで、この場所が城と城下町との結節点になっていたことを示す、重要なサインとして読み取ることができる。同時にこの地点が、城下空間を構成する各要素の配列上の基軸線に相当する、メイン・ストリートの起点でもあったことを暗示するものと見てよい。ただし、この大通りが城の大手道たり得るかどうかは、後の城郭構造の考察の中で、視点を変えて検討してみたい。

## (2) 町場Ⅰ—中心的町場地区

「殿町」地区を縦貫する本通りを東進すると、その末端では「名護屋浦」に向う三本の道筋が分岐するが、この道筋に沿って町場地名が連続し始める。特に、「茜屋町」地区、「浦町」から「魚屋町」・「中町」にかけての湾岸地区、「材木町」地区の一部などでは、典型的な短冊状地割が密集しており(図5)、武家屋敷地区の様相との相違が瞭然となっている。

その中の「茜屋町」・「兵庫屋町」一帯の町区を、内藤氏は前掲論文において『屏風』に描かれた建築水準の格差の分析を通じ、中心的街区として位置付けたが、確かに、「茜屋町」での短冊状地割の連続性・密集度は城下でも最も顕著である。これまでの発掘成果により、名護屋城と陣所における建築基準尺は一間〓六尺五寸と推定できるが、これで換算

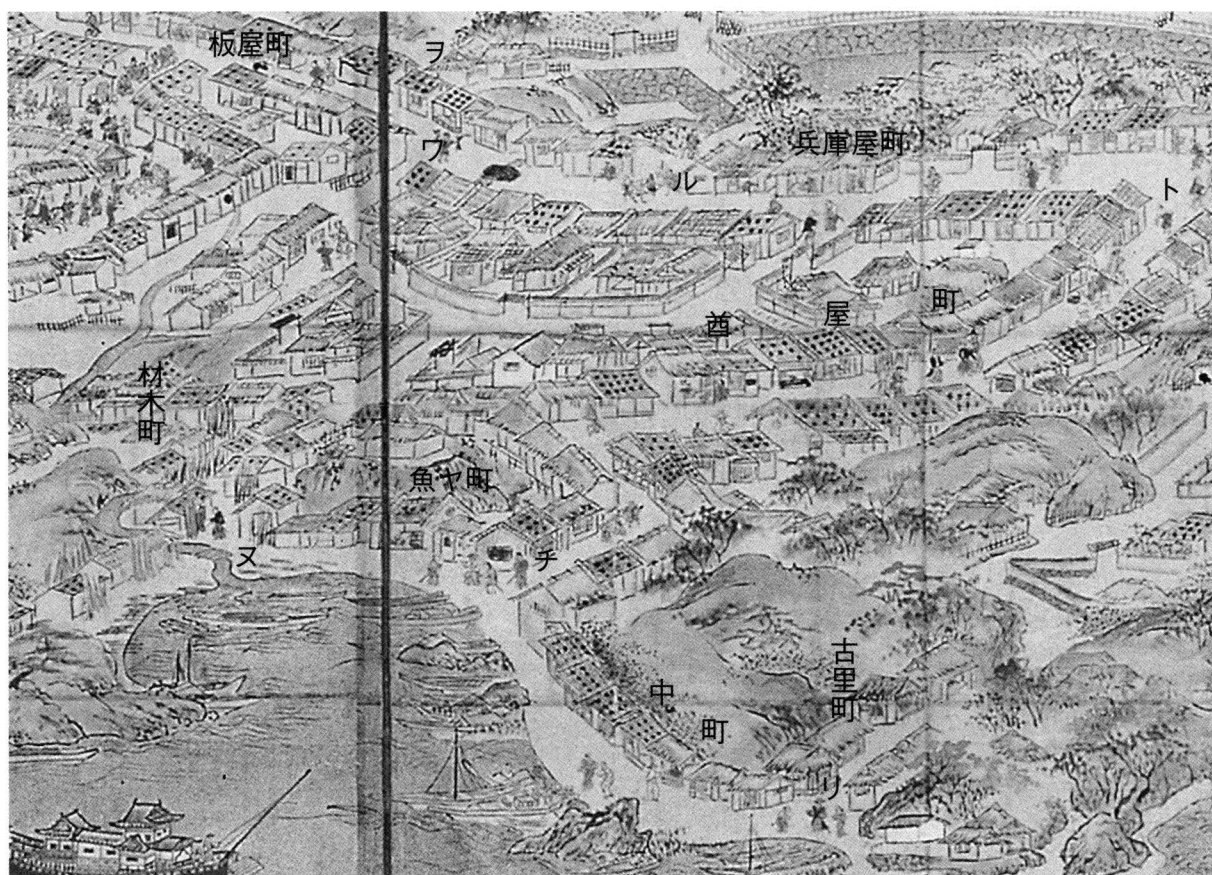


写真7『肥前名護屋図』屏風(部分)・町場の中心地区(ト〜ワは、図4中の同記号の各地点に比定できる。)

すると、間口三間〜四間半内外で最大が八間、奥行は十二間〜十八間を主流として最大二〇間を測る、狭長な敷地制が道の両側に連続している。敷地規模としては、豊臣前期大坂城下・平野町の屋敷割の規模(奥行二〇間<sup>(65)</sup>)や豊臣後期同城下・船場の屋敷間口(四〜五間×奥行二〇間<sup>(66)</sup>)に近似している。偶然の一致と見なすよりも、奥行二〇間という近世城下町の標準的サイズが確定しつつあった当該段階の、共通規格として位置付けるべきであろう。

港に向かって下っている基軸道には幾筋かの小路の分岐と交差点が見て取れ、「配陣図」中にある「アカネヤ丁辻」との注記を勘案すれば、裏地への町域の成長傾向と、ある程度の町割の意識があった可能性も推測できる。

このような様態から見ると、やはり「茜屋町」筋が町場の中枢を占めていた可能性が高いものと捉えて良く、前掲・名古屋村庄屋覚書に現れる「太閤様御在城之節、御用承諸商人等差置候阿か年町」との説明は、軍需供給の中軸を担った商業地区としての記憶を語ったものと解釈できる。

『屏風』中の同地区に該当する一帯の情景描写にも、明らかに中心的商業地区としての賑わいを示す表現が集中している(写真7)。両側町の展開を表す町並の様子は、多くの石置板葺の家屋によって構成されており、その中には卯建を持った建物が相当数見受けられる<sup>(68)</sup>。通りに面して迫り出した「見世棚」と売品の陳列、軒下に吊るした品、暖簾などを備えた家屋の正面外観は、『洛中洛外図』から継承される商家表示のための共通記号と考えて良いだろう。

町場地区全体の描写の大きな特徴は、建築物だけではなく、通りを徘徊する人物の風体のディテールにも現れており、武家屋敷地区のそれとの相違性が強く意識されている。士分の他に女性の描写が目立ち、荷(米俵か)を背にした商人らしき一団や、芝を担い歩く「振売り」らし



図6 氏家行広陣跡遺構配置図(註71報告書掲載図を引用・加筆)



写真9「女郎町」か



写真8「麦原町」

〔『肥前名護屋図』屏風(部分)〕

き姿も認められる。ラフ・スケッチに近い簡略化された描写ながらも、店番と客との交渉らしき場面も数箇所で見ることが出来る。さらには、「茜屋町」地区の通りの中央に、黒い鍔広の帽子を被った南蛮人までが描き込まれているのは、まさしくこの『屏風』の世界の時代的特質を反映した点景と言える。

これらの『屏風』の描写の中でも特に注目しておきたいのは、「配陣図」中の「アカネヤ町辻」付近に該当する地点の商家の裏地に見える、瓦屋根・白漆喰壁の建物の存在である。一見して土蔵を表現したものとして理解できるが、中世以来の臨時開設「市」的空間を構成していた、「仮屋」の集合体の延長線上にあるような町景観ではなく、半永久的建造物を多く備えた町場としての印象を強めるものである。同時にそれは、この通りに面するエリアが町場の中心的位置を占めていたことを説明付けるための、象徴的な標識と考えられる。

また、一方でこの類型的標示は、この町の社会構造を考える上での数少ない手掛かりとなるかもしれない。同種の土蔵施設は、「茜屋町」の描写よりも略化されているものの、他に「材木町」裏地の川筋と「古里町」の端にも一基ずつ見られる。この備蓄施設を持つ商家の表現は、町場の構成員の中に、少なからず「有徳人」も居住していたことを物語っていると考えられ、この急造の商業圏にも居住者間の階層性が内包されていたことを想像させるものである。

そして、『大和田』には当地で銭貨との換銀を行っている記述も見えるのだが（四月二十日条）、当時の為替の普及度から考えても金融関係業者の滞在は至極当然のことであり、土蔵の描写の意味するところは多岐にわたってくる。穿ちすぎた見方かもしれないが、町名の「茜（あかね）」とは、実は染料・衣類を指すものではなく、長崎の「銅座町」、駿府や大坂の「銭座町」などと同様の、銭貨にかかる「銅（あかがね）」の転訛名称なのではあるまいか。

### （3）町場Ⅱ―散在型町場地区

武家屋敷地区の東端から湾岸にかけて展開する中心的町場とは別に、大名陣所が林立する内陸部には、「石屋町」、「大久保町」、「麦原町」、「塩屋町」、「在郷町」などの町地名が点在している。『屏風』中の各地点に該当する部分には、中心街区のそれと遜色の無い建物群によって構成された、集落景観が確かに描かれている（写真8）。

ところで『大和田』では、記録者が所属する佐竹軍が名護屋在陣中にもかかわらず、「ナゴヤ町」、「ナゴヤへ参る」というように、城下をまるで別の地所であるかのように扱った用例が度々認められる。前章でも引用したが、「ナゴヤ」からの帰路に「麦わら町」で知人に会ったという記述（七月八日条）はその典型例である。つまり、城下から名護屋浦岸にかけて展開する「茜屋町」等の中心的町場とは別の空間として認識されていた位置（あるいは相対的關係）に、「麦原町」などの散在型の町区が並存したことを暗示しているのである。

名護屋城下町の多元的な空間構成を特徴付けている、これら複数分在町場の集合体が、どのような規則性に基づいて配列されているのか、あるいは中心的町場地区と質的にどのような相違性を持つものなのか、具体的には不明な点が多い。

「麦原町」の現況を見てみると、畑地ないし荒地となっている同地区を縦貫して、近世初頭頃（天正～寛永期頃）の石塔類が点在する、ほぼ直線の「切り通し」古道が五〇〇mにわたって残っており、旧地籍図上にはこの道に沿う小規模な方面地割の連続が看取できる。現段階では、短冊条地割の稀薄さという点において中心的町場との相違点が指摘できるにすぎず、中軸街路に規定された町場の展開を漠然と想像するのみである。

これらの散在型町場の発生要因を考えると、その立地条件から、

陸道および周囲の大名陣所との関係が推測できる。唐津・博多方面からの陸路（「太閤道」との異称を持つ江戸期の唐津街道<sup>(70)</sup>）は、城下の「殿町」地区を経由して、諸大名陣所の密集地帯である波戸岬方面へと通過しているが、軍事基地内の主道に相当するこの往還もしくはその分岐道に面して、散在町区の多くが位置していることに注目したい。つまり、複数の大名陣所の隙間にあつてその軍需をまかなう、局地的な経済活動を主とした町場であつたことが、まず想像される。

右の推測は、一九九三～九四年に実施された氏家行広陣跡周囲での発掘調査の結果<sup>(71)</sup>によって補強することができる。この調査では、東西約一八〇m×南北約一〇〇mの範囲内で、複数の溝や柵によって三～四エリアに連続区画された建物密集地区が検出された（図6）。各区画の内部は柵や溝により一定の計画性を持つて細分化されており、長屋跡や便所遺構の可能性を持つ土壌などを伴っている。施設の規模と規格、密集度などには各ブロック相互の等質性が現れており、長屋を主屋とする点からしても、陣の中核部ではなく、その外縁の部隊駐屯地区に相当するものと捉えるべきで、陣内部の重層的な空間構造を知る上でも、非常に興味深い成果を得ている。

本論にとって、より重要なのはこれらの区画の外の世界であつて、調査区の南では陣域を規定する二箇所の木戸口を伴う溝が、東西一五二mにわたつて検出されているが、この強い閉鎖性を發揮している溝の外には、道としての共用を推測させる幅九m前後の空白地があり、これに面して小規模な溝に仕切られた小区画群が発見された。陣跡西側の木戸口の正面付近（図6中A）には、間口九m×十四m×奥行十五m以上の区画が三ブロック前後並んでいる。内部の掘立柱建物跡の存在から、小規模な屋敷地であることが分明だが、各ブロック内が柵によってさらに細区分されていた痕跡もあり（最小で一辺九mの平行四辺形に近い空間が見いだせる）、極めて小さな生活単位の存在が確認されたのである。

一方、陣跡東側木戸口の前面（図6中B）では、若干量の鉄滓の出土、被熱した礫が集積した落ち込み状の遺構、炭化材と数点の土師器皿を伴う被熱した土壌など、何らかの工房施設の存在を想起させる痕跡が見つかっている。また、小児の土壌墓も検出され、兵卒とは違う生活主体の存在が確定的となった。

調査範囲の制約もあつて、残念ながら商工層の居住を決定付けるまでの史料に不足するものの、何らかの生産活動に関与する小規模な生活ユニットが、陣に隣接して存在していたことが明らかになったのである。恐らくはこれらのユニットが、散在型町場の構成単位となつていたものと推測できる。

たとえば、「配陣図」中の「大久保丁（町）」を見ると、武家居住地と町場とが接続していたことを明示するように、町中に陣所標示が付されている（秀吉馬廻衆の御牧景則比定陣）。これは、城下の中心地区ほどには武家地と町地との「住み分け」状態が徹底しておらず、兵・民混在の空間であつたことを示すものと解釈でき、氏家陣とその外回りに存在する小規模屋敷地との関係に該当するものと考えられる。このことから、散在型町場は、城と港とを結ぶ基軸線上に発達した中心的町場とは異なつた発生原理と機能を持つものと見られ、大名陣所との個別密着した関係が推測できるのである。

なお、これらの散在型町場の中に「女郎町」が存在する点に注目しておきたい。現在、この町名ないし所伝を持つ地区は、名護屋浦の最奥の湯川河口付近（図1中a）と、「塩屋町」の東側の海岸付近（図1中b、図5中B）、湾岸の「泥町（女郎）」の転訛とされる<sup>(72)</sup>）付近（図1中c及び図4中C）の三箇所がある。いずれも城下東側の海辺に当たり、位置特定は困難だが、『屏風』左端の海岸にそれらしき家屋が点在するエリアの描写がある（写真9）。そこには、簡素な建物の中に居る赤衣着物を纏つた女性が、数人の侍と語らう様子が描かれ、上杉家本『洛中洛

外図』にある「畠山辻子」の遊女町に近似した光景が再現されている。これが「女郎町」の所在を表現したものとすれば、城下から最も離れた湯川河口付近に位置比定でき、ちょうど都市「名護屋」の周縁に当たる地点になる。これは、都市的空間の必携アイテムとも言うべき「遊興の場」を、名護屋が内包していたことを示す例に他ならず、この城下の再評価を促す重要な構成要素の一つに数えて良い。

#### (4) 宗教施設

現在、城下に存在する寺院の中で、豊臣期やそれ以前に開山したとの所伝を持つものとしては、観音寺（曹洞宗）、竜泉寺（同）、法光寺（臨済宗）、専称寺（浄土宗）などがある。この中で、竜泉寺（旧名・龍源寺）は徳川家康本陣の設置によりその東隣に移されたと伝えられ、法光寺についても木下延俊陣の設置に伴って城下の西端に移動したとの寺伝を持つ。

専称寺は寺沢広正により創建され、唐津城主になった息子広高が寺号を浄泰寺と変えてその城下に移設したため、改めて跡地に建立したのが現在の寺とされるが、慶安二年（一六四九）二月六日付で上神田村庄屋清水十郎左衛門他二名が唐津城下の近松寺、少林寺に宛てた申上書（近松寺所蔵文書）にも、浄泰寺の名護屋からの移転経緯を明言していることから、寺伝の内容の信憑性は決して低くない。

これらの寺院のほかにも、所在地が判然としないが「名護屋端坊」なる本願寺譜代の寺坊があつて、その境内には善海坊、順海坊、龍泉坊、了善坊、了休坊、永元坊（「名護屋六坊」といった坊が存在していたことを江戸期の地誌類は記している。<sup>74</sup>）秀吉在世中、端坊が本寺より安楽寺との寺号を与えられた折り、この六坊にも寺号が授けられ、それぞれ本勝寺、安浄寺、正円寺、行因寺、伝明寺、養託寺と称した。その後の唐津城下町開設時（慶長七年（一六〇二）頃）に、安楽寺ともども同地に

移転されたとの経過が、「安楽寺縁起」<sup>75</sup>他の各寺伝に共通の沿革として残されている。

これらの寺院の全てが同時期に実在していたかどうか、個別の実証は困難だが、七年間に及ぶ人口集中を思えば、最低でも複数の宗教施設が名護屋にも所在していたと想定する方が素直であろう。豊後臼杵の安養寺の僧侶慶念は、宗祖親鸞の命日に当たる慶長二年（一五九七）六月二十八日に、領主太田一吉に従って名護屋浦に入港した際、「此なこやの津ハおとに聞つたへし所なり、殊更御明日<sup>（命日）</sup>なりけれハ、さためて御道場も御座アラン、またハ見物せんとおもひけるに……」<sup>76</sup>と、その繁栄ぶりから真宗系寺院の存在を確信している。彼の目から見ても、名護屋城下は一定数の宗教施設を内在していて不思議はないだけの都市規模を誇っていたことが窺える。

この慶念にしても太田氏の従軍僧であつて、徳川家康も数名の僧侶を同伴し在陣していたことをフロイスは記しており（『日本史』第六十九章）、渡海地での通辞や戦没者慰霊といった必要性から、各国からの多数の僧が滞在していたものと見なければならぬ。従って、右掲のような多くの寺院の存在を推定する条件は整っていると言えよう。

ところが、寺町に相当するような寺院密集地区の存在は、現況からは明確に窺うことができず、なぜか『屏風』にもそれと認識できる施設は描かれていない。『配陣図』中では、「殿町」地区と「麦原町」との境界付近（「辻堂」と称す）に法光寺と幾つかの小堂が隣接し合う地区が記され、「茜屋町」から港にかけての主道の山手側には、その他の主要な寺社が分布している。この情報を信用する限りでは、武家屋敷地区の東西両端における宗教施設の偏在が窺え、一見、町場との境界をなす位置を占めているようにも見えなくもない。しかし、街区的な構成を持つまでの様相には全くないのである。



## ⑤ 城下空間の基本構造とその特異性の意味

前章で見たように、名護屋城下の中心部の基本的構成は、城の北隣にあつて濠の走行に平行するように縦列配置された武家屋敷地区と、その東端から港にかけて展開する中心的町場地区とに分立しており、平面上は相互に接近し合う空間構造にあつた。この一帯が狭義の名護屋城下町の範囲であり、「天和田」に言う「ナコヤ町」に当たるものと見られるが、さらにその周囲には「石屋町」、「大久保町」、「麦原町」などの、城と大名陣所とを結ぶ幹線沿いに発生した町場が散在していた。それらの総体として広義の軍事都市「名護屋」が形成されていたと考えられる。ところで、この城下の広がりを実際の地形上に当てはめてみると、相当に起伏の大きな地勢環境下で展開した町であつたことに改めて気付かされる(図2、4)。

まず、武家屋敷地区が所在する丘陵地は、名護屋城の水手曲輪の麓付近から北に派生して濠を抱き込むように東走しているが、濠岸よりも四(五mほど高所(標高四三m~四八m)を占めている。この尾根地形は四〇〇mほど東走した所で二股に分かれ、北側の支脈は徳川家康本陣が、南側の支脈は木下吉高らの陣所が占有している。龍源寺等の寺社比定地は、これら城下隣接型の陣所が存在する尾根地形の中腹や先端に位置し、やはり比較的高所に立地していることが分かる。<sup>(7)</sup>

対するに、町場地区は、この尾根分岐点付近から海岸線にかけて発達した幾筋かの谷地形内や、尾根の斜面部一帯などの低地のみに集中している。「材木町」、「茜屋町」以下の主要な町筋を形成する三条の谷地は、名護屋湾岸で合流して「魚町」、「海土町」などの浜地の町場の敷地へと変化している。「平塚状」にある「たに」<sup>(谷)</sup>は皆町にて候(中略)……ま(唐船)ち中に直にとうせんを着候」との一節は、まさしく町場の地形的特徴を簡

潔に著したもので、汀線に直結した形で町屋密集地区の展開を明示している。その景観は一般の港町としての姿と変わるものではない。

こうした城下町内部での極端な地形変化を見る限り、近世城下町の指標的な形成過程である、低平かつ広大な造成地を下地とした計画的建設を経たものとは到底思えない。変化に富んだ旧地形をさほど改変せず、むしろその高低差をそのまま踏襲して、単純に城回りの高所を武家屋敷地区に活用し、その裾部から港にかけての狭隘な空間に町屋を押し込めたような格好となっている。

前述のように『屏風』中の武家屋敷地区の全景では、方形敷地の屋敷を構成単位とする整然とした街区の展開が描かれているが、現実には、本通りの両サイドの狭長な空間内とその縁辺に限ってのみ、そうした地割が確認できるにすぎない。他の大半の区域は海岸線に向かう傾斜地ばかりで、雛段状の造成地でも設定しない限り、まとまった敷地の確保が不可能な、著しい地形上の制約を受けた空間である。この粗放とも言える土地活用のあり方が、名護屋城下町における都市プランの完成度の低さを最もよく示している。

それでも、主道から派生した数条の小径が、この傾斜地を下るように延びていることから、広範な街区設計の意識が多少なりとも存在していたことが想像できる。具体的には、武家地区の北から北西部一帯の地割で看取でき、地形起伏に規制されずに直進する数条の東西道と小径との交差によって、歪んだ格子状の区割りが形成されている(図4中※印の区域)。「屏風」にある類型的な街区景観の表現と考え合わせると、当該期の城下町が指向した平面形態の内容を知る上で興味深い。

次に、城下町内部の空間分化の有様について考えてみたい。武家屋敷地区を縦貫するほぼ直線の主道は、フロイスが記す「真直ぐで立派な街路(前掲史料8)」に該当するものと見ることが出来る。実質的な城下のメイン・ストリートに相当するこの道の途上の、武家地から町場へと



変化する尾根分岐点付近には、両地区の境界の具体的位置を示すものと思しい「マチガシラ」との呼称を持つ地筆が存在する。「殿町」から延びてきた縦貫道は、この地点の前まで達すると、「茜屋町」↓「浦町」↓「兵庫屋町」↓「材木町」↓「港」、徳川家康本陣前↓「古里町」↓「海士町」↓「港」の、三筋の町場ルートへと分派していく。近世初頭からの石塔類が集積されているこの地筆は、その名の如く、城側から見れば町場の起点（「カシラ」）であって、港側からすれば町場の最奥部に当たる。即ちこれは、城下内部での居住地分化の記憶を留めた呼称地名と解釈でき、決して中心的町場と武家地とが混然となつて展開していなかったことを証言してくれている。

しかし、この「マチガシラ」を含めた両地区の境界帯付近には、堀や土塁のような可視的な区分標識を設置していた様子は見出せない。考古学的検証を待たずして、木戸や柵等の簡便な施設の存在までを否定するものではないが、物理的に遮蔽・分断能力を発揮するだけの立体構築物が設けられていた痕跡が希薄なのである。

「配陣図」には、武家地を圍繞する外郭線が存在を連想させるような、細長い「山地」の表示が描かれているが、そうした形跡は地籍図上にも確認できない。現況地形と対比すると、屋敷地区の外縁部（裏手）のほとんどが急斜面をなしていることが分かり、つまりはこの小さな崖の連続帯を表現しているものと見なせる。要するに、地勢的には城域の延長上にある武家屋敷地区は、中心的町場との間に現在よりも明瞭な高低差を介在させていたと考えられ、平面形態上では両空間は隣接し合うものの、三次元的には地形段差によつて一応は隔絶された景觀にあったものと推測できる。別言するとこの城下町は、この地形変化によつてのみ、漠然とした空間区分を果たしていたにすぎなかったとも言えるのである。

そして、このような開放的な平面形態の城下町が成立したのは、この都市の本来的な存在理由にも起因しているものと推測する。

改めて言うまでもないが、名護屋城自体は地域統轄のための行政府としての存在にはなく、「御座所」（前註15他）という位置付けが明示しているように、あくまでも秀吉自身の朝鮮渡海のための一時滞在施設に他ならない。外国への出兵基地であればこそ、大規模な船舶収容に足る水面上のキャパシティを有した海岸地形を抱えていることが、第一義的な城地の選択基準となった。<sup>(79)</sup>その碇泊能力の卓越性を優先した場合、海岸線沿いの平地面積の広狭については、選地の際の絶対的条件とならなかったはずである。

城下の経済システムについても、戦地へ輸送する物資の備蓄と、この地に駐留する軍勢の安定的生活の継続のために定義付けられていたはずで、その点で言えば、都市民（この場合、駐留兵卒以外の非戦闘員を指す）の生活圏の充実を必ずしも前提とはしない。

また、やや極端な捉え方をするならば、この町は周辺地域の生産性や経済動向に直接的には左右されない世界なのであって、その生命維持は全国家から集積される物資の窓口であった軍港「名護屋浦」の機能に委ねられていた。その図式上では、この都市の発生要因であったはずの名護屋城そのもののさえも、港に完全依存して存続していたとも言える。

そうした構図から見れば、町場は港湾機能に依拠して成立・持続していたがために、浜地に直結する狭険な地形からは脱し得ず、一方で武家屋敷地区は、臨戦体制にある城郭の軍事機能の一翼を担うものとして発足しているわけで、城地の急峻な地勢の延長上に位置することを原則としていた。従つて二つの空間は、港と城とのそれぞれ別の「核」に従属しながら同居していたと言え、少なくとも町場については、城主側が地域の経済拠点化のための積極的「経営」を目論んでいない以上、城との直結を必要絶対条件とする論理上には出発していなかったはずである。<sup>(80)</sup>

たとえば、町場名称を瞥見すると、他の多くの城下町に普遍的に観察できるような、城の求心力の波及度を反映した町場間の序列的な名称――

## ⑥ 城と城下町との連結状態に現れた矛盾点

本町、元町、上町、大手町―の類が、全く看取できないという点に気付かされる<sup>⑧</sup>。唯一、港沿いに「中町」の存在を知るが、これも軍港岸の複数の町区（浦町、「海士町」など）の中間位置にある町場といったニュアンスに近く、城との距離関係からではなく港湾の付随集落としての属性を示すものであろう。このことは、名護屋築城と町場形成の間に、相互一体的な設計理念が存在していなかったことを予測させるのである。

前章で見たような城・武家地側と町場側との間の不統一な発生図式を確かめる意図から、城と城下町との具体的な連結状態の特徴を以下に見ていこうと思う。そのため最初に、名護屋城の内部構造についての検討が必要となる。

城郭を構成する各曲輪空間の区分・連携状態の分析を通じて、城域全体の展開方向（正面方向）を考えることは、城を中核とした都市形成における計画性の精度とその内容を理解するための基礎的作業に相当する。つまりここでは、城下町全体の基軸線となったはずの、大手道に当たる城外への中心的導線の起点と派生方向を、城郭サイドから見直すこ

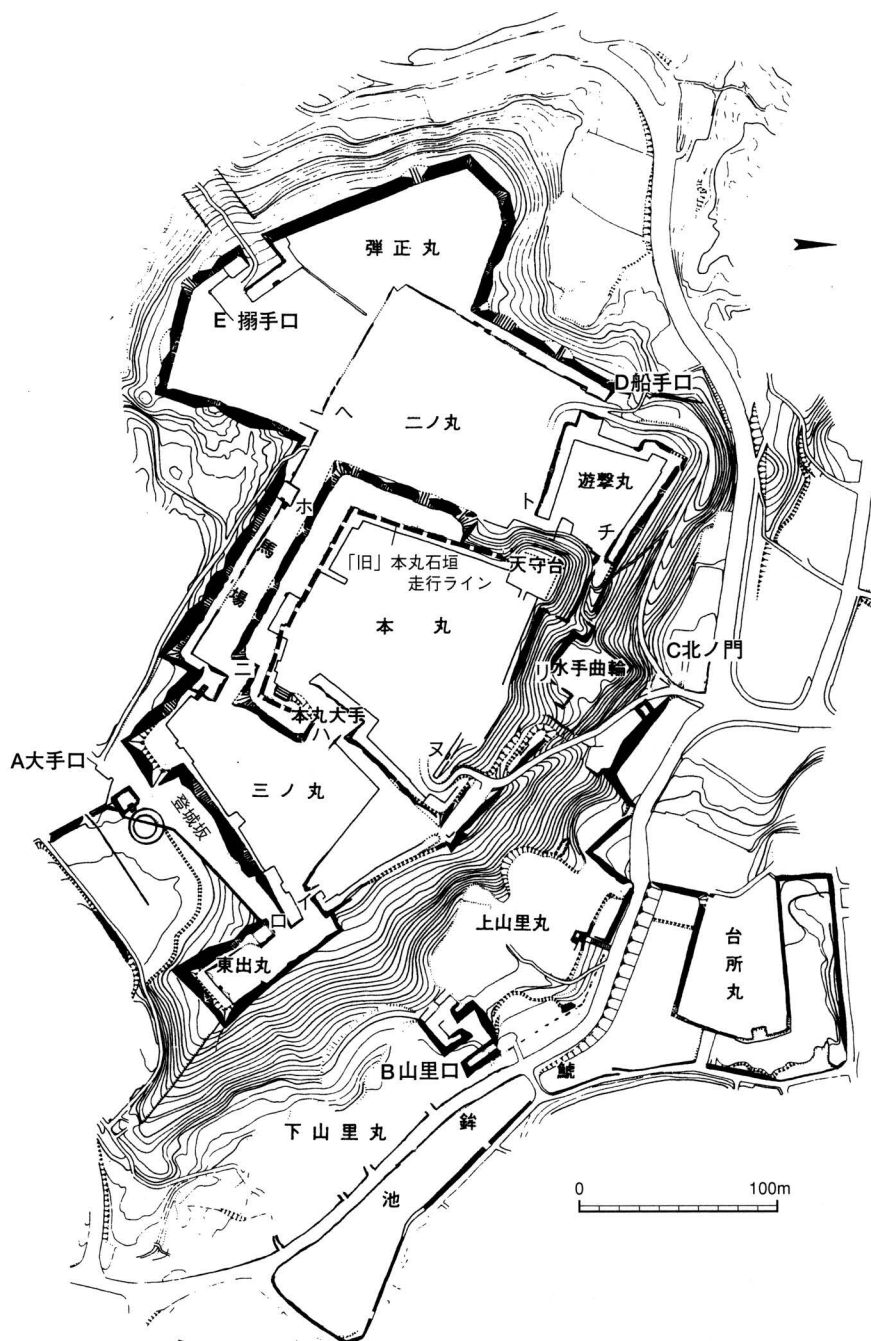


図7 名護屋城平面図（註20論文掲載図を引用し、一部加筆修正）

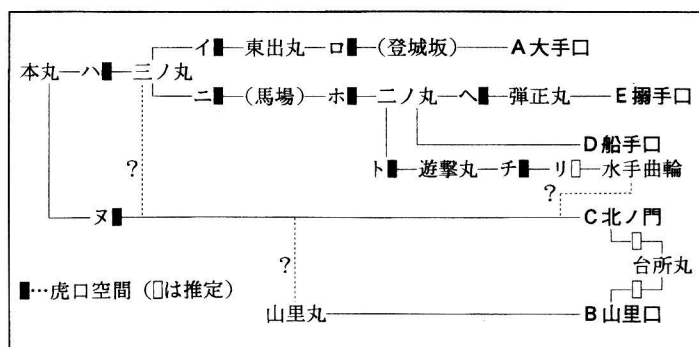


図8 名護屋城内主要経路模式図（記号は図7中の各所に対応）

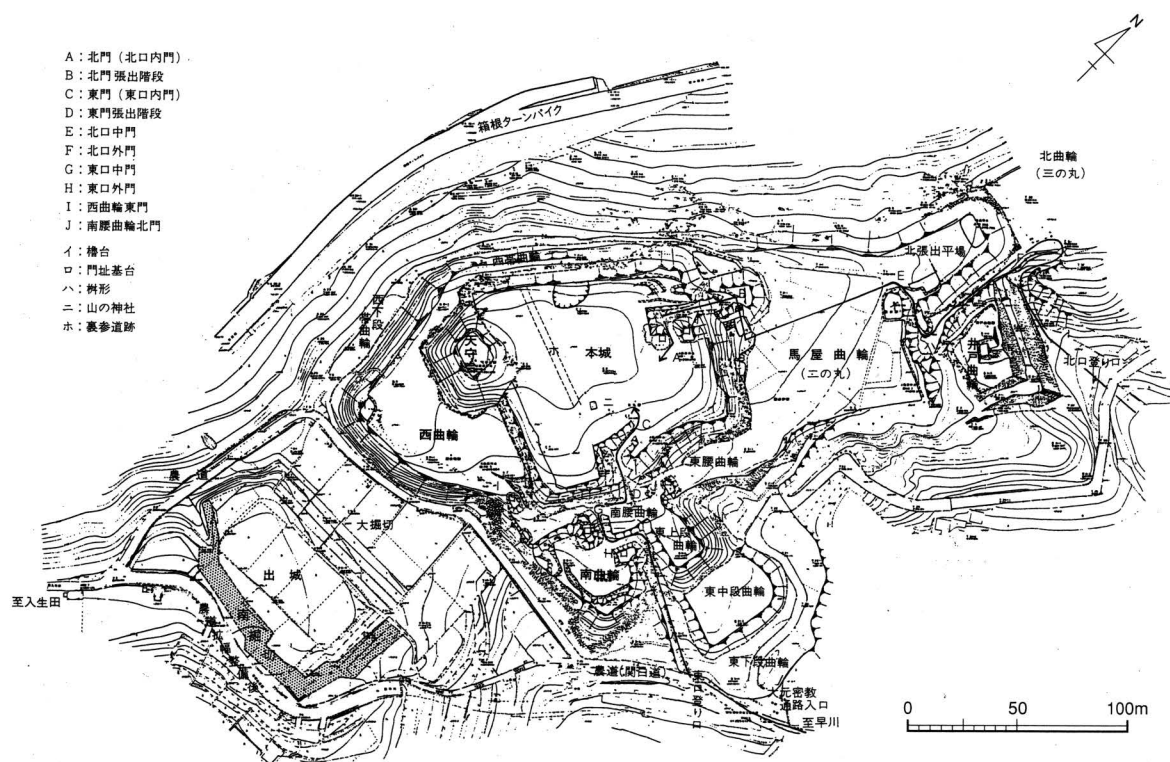


図9 石垣山城遺構図(小田原城郭研究会「国指定史跡石垣山一夜城跡現況調査報告」『小田原市郷土文化館研究報告』No.25 1989掲載図を転載)

とで、城下町を構成する諸要素の配列についての規則性の有無を検討していくことを目的とする。同時にこれは、名護屋城が有していた隣接空間への求心力の、主要な波及方向を探り出すことにもなる。

名護屋城が立地する「勝雄岳」は東松浦半島の「背骨」に相当する上場台地最北端にあり、四方に派生する尾根地形と周囲に点在する小丘陵との間に発達した、幾つもの谷状地形の連続によって、独立丘陵としての隔絶した地形を保っている。

城内は、地形起伏の状態から二つの空間に大別できる。天守閣を最高所(標高八八・七m)とする本丸周囲の曲輪群(「城山」と総称される区域)と、その北側の急崖下に位置する山里丸から台所丸にかけての低平地空間(標高四一m～五四m)から成り、山里丸前面を画する「鯉鉢池」が、城下城との一応の境界標識をなしていた(図7)。

城の中心部は、本丸を東西両方向から補佐する形での曲輪配置がなされており、東に三ノ丸と東出丸、西に二の丸と遊撃丸を置いて、両空間を本丸南下の帯曲輪(通称「乗切馬場」)で連結していた。こうした中枢部の連立的な曲輪配置形態は、松岡利郎氏によって石垣山城や大坂城にも見られる豊臣氏拠点の共通性であることが指摘されている<sup>(82)</sup>。特に、プランの可視的な対比ができる状態にある石垣山城(神奈川県小田原市)の構造(図9)と比較すると、名護屋城の東出丸と石垣山城の「北張出平場」、前者の弾正丸と後者の南曲輪など、他の曲輪配置の状態や虎口形状とその位置にいたるまで、全くのコピーと言っても過言ではないほどの類似性を持つことが指摘できる。これが、豊臣氏城郭の曲輪配置の基本的形態であるのか、それとも、陣城としての臨時駐屯施設に限っての規範性であるのか、他に全体構造を実見できる城郭遺跡が残存していないためにその判別は困難である。ともあれ、このことから見ても、名護屋城の空間構成は、少なくとも地形的条件に拘束された結果の縄張によるものではなく、豊臣氏が保有していた一定のモデル・プランを具現

化したものと評価できる。

城の内外を結ぶ主要な虎口は五箇所あつて、城内の各曲輪間の導線との関係から見ると、図8に模式化したようなルート上で機能していた。こうして見ると、山上主要部の各曲輪間の連絡体系は、本丸と三ノ丸とを繋ぐ本丸大手（ハ）を起点とし、二ノ丸自体は城内西・南半域の径路のジャンクションに相当する機能を発揮したことが容易に理解できる。

注意すべきは、A大手口からの導線が、ほとんど独立的なコースをたどつて三ノ丸へアプローチする体裁になっている点である。この場合、東出丸が大手「登城坂」からの進行方向を受けて、曲輪内部に引き込み三ノ丸への中継を果たすべき位置にあるのだが、実質は三ノ丸への導入虎口（ロ）を補佐するための所謂「武者溜り」の機能を主眼とした構造になっている。要するに通過点であつても中継空間にはなっていない。これを見ても、「大手」と称されている割には、比較的簡易なルート設定によつて中心部と城外とを結ぶ格好となっていることがわかる。

対するに、最も周到な導線の設定が窺えるのが搦手口方面からのルートであり、最低でも五箇所の虎口と四つの曲輪空間を経由しなければ、本丸へ到達できない構造をとっている。なお、このルート上の各虎口空間を形成している石垣には、搦手からの進行方向に直面する位置を選んで巨石（伝統的積み技法で言う「鏡石」）が使用されている箇所が多い。中でも、天守台に次ぐ規模の櫓台を持つ三ノ丸南西虎口（ニ）には、重量十一tを測る城内最大の巨石が組み込まれている。この意匠性の強い土木技術の投入の仕方から見ても、この導線の重要性が指摘でき、とりわけ強い正面性が看取できる<sup>(83)</sup>。

また、単純に虎口空間の規模を比較しても、搦手口は主要虎口の中でも最大の規模を誇っており、開口部の幅員が十二mを測る巨大な内枳形をなす。その前面には、小さな曲輪に匹敵する規模（南北約三五m×東西約二〇m）の「虎口受け」状の張出空間を付随させ、重層的な防備構

造を形成している。

これらのことから、名護屋城の実質的な大手方向は、「搦手口」と称されてきた最南端の虎口に求めるべきで、そのことは、城内の各曲輪の配列状態が、城山北辺を最高所として南西に向かつて漸次高度を下げながら展開していることから読み取れる。本来的には城郭の表・裏の方向を示すはずの「大手」と「搦手」の名称が、実際の機能上では逆転していることが確認できるわけで、その原因については、今のところ廃城後の口伝の中で生じた誤謬の結果としか説明がつかない（一つには、主要往還である江戸期唐津街道が、現況「大手口」に直結していることと関係があるかもしれない）。

さらには、搦手口の開口方向に当たる城外南西側の丘陵地一帯が、秀吉子飼いの諸大名陣所の密集地区となっているのも、この虎口的重要性を裏付けている。片桐且元・貞隆、木村重隆、木下勝俊、加藤清正、福島正則、堀秀治といった面々の陣が林立するこのエリアのさらに西には、諸大名陣所中の最大規模を誇る豊臣秀保（秀吉の実弟秀長の養嗣子）陣や宇喜多秀家陣が配置され、その外縁に所在する鍋島直茂、毛利輝元、長宗我部元親といった外様系の有力大名陣との間で、ある種の緩衝地帯を形成している（図1）。さながら、大手前面の重臣居住地区といったこの方面に向かつて、城郭の縄張が展開しているのは、出兵途上の駐留拠点というこの城の本来的性格からすれば、至極当然な空間構造にあると言えるだろう。

ここで、本章の主旨との関係を確認しておこう。名護屋城の場合、その曲輪群の配列状況から正面方向を考えるに、実質的な大手に該当する「搦手口」の位置から見ても、豊臣直屬軍を構成する主力部隊が駐屯していた城城南・西側の山丘部に対座するように設計されていることが明確であつて、つまりは、城下町が存在する北域から海岸線に対しては、完全に背を向けた構造をとった城郭であるものと結論付けられる。従つ

て、「大手」も「搦手」も、城下町の主要道の起点となつてはおらず、ここからは町場はおろか、「殿町」地区に連絡する道さえ定かではない。

そうすると、他の三つの主要虎口に関して、城下町との連結の可能性を求めなければならない。城の最西端にある「船手口」は、波戸岬西岸に続く谷地形の起点部に向かつて開口している上に、城下地区との間に毛利吉成・小早川隆景の陣が所在する丘陵が横たわっていたため、直接的な城下への出入りは想定しがたい。

「山里口」は、城内で最も複雑な平面構造を持つ虎口ではあるが、あくまでもその機能は秀吉の私的生活空間に相当する山里丸への導入を主とするもので、厳密には城内経路上の虎口の一つと見なされる。少なくとも城下との接点となっていないのは、その前面の「鯉鉢池」が城下側との隔絶を果たしていることから明らかである。

結局、城下地区との直接的連絡は、唯一、北ノ門によって維持されていたと考えざるを得ない。この虎口を出て、台所丸への導入部を右手に見ながら一〇〇mほどまっすぐ北進すると、『屏風』に描かれている先述の「馬屋」の付近に差しかり、ここで「殿町」地区を縦貫する城下のメイン・ストリートと合流する状態になっている。

しかし、この虎口を起点とする城内への導線は、「葛折れ」に折曲しながら登頂する形態での防護上の配慮がなされているとはいえ、途中に他の曲輪空間を全く介在させることなく本丸に達している(図7)。その安直さは異様とさえ言えるもので、近世初頭以後の複数郭群構造にある完成型城郭の中で、城下町の中心地区から本丸へ一気に直登するような主導線を持つ城などは、恐らく他例を見ないだろう。しかも、それは、本丸の正面ではなく側面にアプローチする形となっており、全体の曲輪構成から見ても、当初設計に乗っていたとは考え難いルートである。

つまり、主力陣所との連携の維持を眼目に置いたがために、南に向けて求心力を集中させた城がまず築かれた。結果、港湾の機能に立脚して

北側海岸線に発達した城下とは、背中合わせのまま別個に展開することとなった。そうした特異現象の解消策として、両者を直結する必要性が生じた段階になって、二次的に「北ノ門」ルートを開設したと見なさざるを得ないのである。同時にこれは、城の正面性に合わせた序列的空間区分の指向性を示す、当時の原則的な城下町プランを、築城当初には規範としていなかったことを意味している。

それでは、ある種アンバランスなこの状態を打開すべく、城の全体設計から逸脱してでも遮二無二に城下町との結合を図ったのは、果たしてどの段階であろうか。再度、開戦時の経過を確認してみよう。

まず、九州大名を主力とした城と陣所の設営着手より前に、港湾周辺における工事資材の搬入と万余の人力の滞在が始まり、町場の母体空間が発生した。天正二十年三月に渡海し始めた九州大名と、ほぼ入れ替わりに参集した近畿以東の諸大名の軍団駐留<sup>(84)</sup>により、消費活動は一気に勃興し、町場は急激な成長を遂げる。そして、四月二十五日の秀吉入城に伴う直属家臣団の参着の時点から、武家屋敷地区が機能を開始したはずで、従って、町場の成熟は武家地の本格的稼働に先行していたものと見なければならぬ。平塚滝俊が参陣直後に実見した町場の興隆ぶりは、ちょうどこの時点である。その後になってから山里丸を含めた城郭外縁部での工事が実施され、以後も追加普請が継続していることは第1章で確認した通りである。

以上の推移から考えると、城下空間との直結を目的とした城の再整備が実施されたとすれば、町場地区、武家屋敷地区、山里丸(秀吉本館)の位置が固定化した天正二十年十一月以降に求められるのが最も妥当と思われる。前述した本丸を中心とする大改造についても、この経過に乗せて理解すべきであろう。

では、右のような再整備を目的とする「後追い」工事の実施を促すような、当初方針の変更に当たる契機は、実際にあり得たのであろうか。

直接それに言及する史料を持つものではないが、これには戦局の推移が少なからず関係していると見なければならぬ。

当初から秀吉は、自身の渡海を前提とした戦争のシナリオを設定しており、早くも名護屋入城の翌月中旬には、釜山・漢城間の「御座所」設営と船舶の名護屋廻船を海渡軍に命じている。<sup>(85)</sup>それが、制海権の喪失と陸上戦線の膠着化を懸念した周囲からの諫止もあって、断念するに至ったのは夙に有名である。開戦から四箇月後の天正二十年八月になって京・大坂へ名護屋間の駅制が規定され、同年十一月に至って造船指令を発しているが、これは、予測に反する戦役の長期化が決定的となったがための体勢再編として見る事が可能であろう。

つまり、その段階から名護屋の性格は、「さんじの御陣宿」(前註25)と称されるような渡海途上の宿営から、長期戦に備えた大本営としての位置付けに大きく変化したと見なければならぬ。事実、開戦当初に秀吉が想定していた名護屋駐留期日の短さは、「於京都被思召候ハ、名護屋二卅日も御座候て、先々へ御人数をも被遣、其上にて可被成御渡海と思召候へ共、名護屋へ御着座候へハ、片時も急御渡海有度候条……」<sup>(87)</sup>との史料にも窺うことができる。それが、戦局の泥沼化に伴う滞在期間の延長の結果、拠点としての拡充を余儀なくされたと考えられる。

この場合、強調しておきたいのは、規模・構造上の次元においての変化ではなく、機能・性格上の「陣宿」からの脱却であって、名実ともに名護屋が首都大坂の「代替地」へと昇格したことを意味する点である。むしろ政治史的観点に立てば、国制の決定権が依然として京の関白秀次ではなく名護屋の太閤秀吉の掌握下にあったこの時期、秀吉の長期滞在は名護屋の「首都化」を必然化していた。<sup>(88)</sup>畿内との連絡体系の整理と強化が秀吉下向後になって実施されているのは、その転換を裏付けるものと言える。

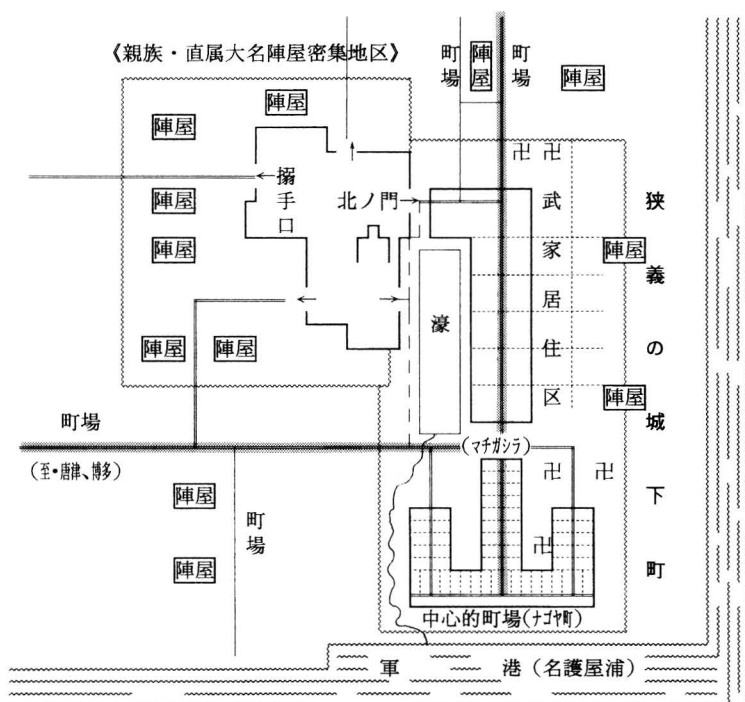
統一政権による京都の都市再編の過程を再考した横田冬彦氏は、信長

の「二条屋敷」や秀吉の「妙顕寺(城)」のような「宿館」が核となっていた段階から一歩進んで、聚楽第という常設拠点が出現したことが洛中の近世都市化への大きな画期となつていと指摘する。<sup>(89)</sup>まさしくこの現象と同様に、開戦後になってから実質的な首都に転身した(せざるを得なくなった)名護屋は、城を核とした町場との一体的空間の創出を目指した動きに変化し、臨海型城下町の完成を模索しかけたものと考えられるのである。

### 結びにかえて―名護屋城下町の本質とは

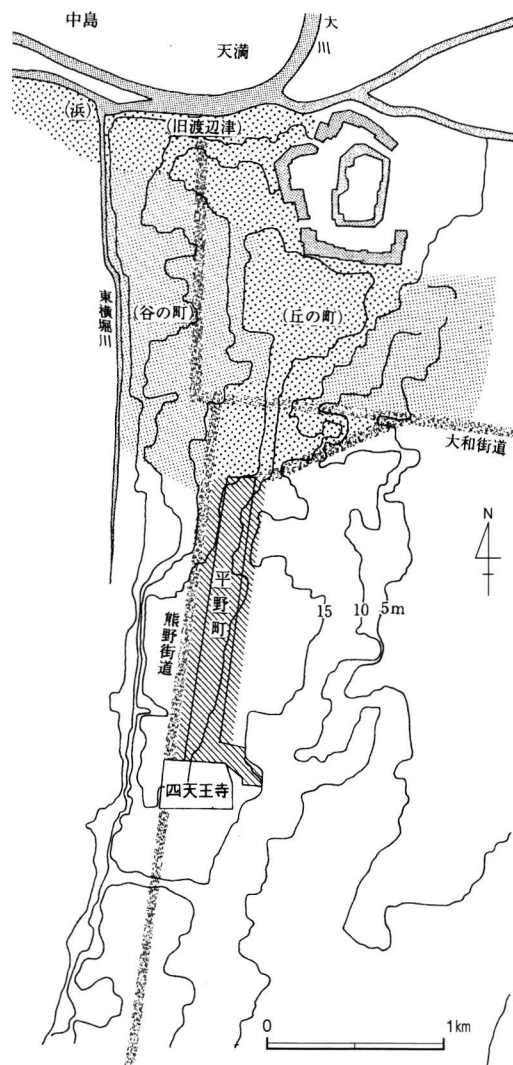
本論で導き出した都市「名護屋」の特徴を最後に整理しておきたい。この軍事都市は、空間配列上では城↓武家屋敷地区↓町場地区というように、基本的構成要素が順序よく階層的に展開しているような配列を示しているものの、それぞれの要素は別個の発生要因によって発達し、個別に完結していると言える。即ち、城は大名陣所との連携の必要性から、武家屋敷地区は城との直結を目的として、町場は軍港の物資集積能力に依存して、それぞれの機能を果たすべき構造を持つて成立したもので、各要素の相互の連関性は、全体統括的な都市計画に乗った形では保たれていない。

ところで、この城下町の町場名称を改めて注視すると、主だった商家の職種を体现しているはずの業種別町地名が、際立って多いことに容易に気が付く。この点に注目した松本豊寿氏は、「軍都の(経済的)機能を効率化」する必要性から同業者の同一町場編成がとられた結果と解釈したが、その論旨は、町場空間の設営に兵站確保を意図した公権力が主導的に関わっていたとの想定に立脚している(前註9論文)。確かに各町に付帯する物品名称を見ると、「塩屋」、「刀」、「麦原(藁)」、「兵庫(具)の訛化か」屋」などの出兵用物資と捉えられるものがある。しか



右、図10 豊臣前期における大阪城下のモデル(前註1勦柄氏論文より転載)

上、図11 名護屋城下町模式図



普請場から完全には脱していない、城・都市建設の用材搬入に伴う資材別管理地の延長にあるような、自然発生的な業種別町場形態の本質を読み取るべきであろう。

より踏み込んだ評価をあえてするなら、「都市」名護屋の実態とは、著名な『築城図屏風』(名古屋市博物館蔵)に描かれる普請場周囲の町場の空間——玉井哲雄氏の解釈に従えば、完成直後の城下町のベースとしての空間ないしは建設途上の城下町の実像——から発展せぬまま軌道に乗っている、ちょうど草創途上の城下町形態と捉えることができる。『名護屋図』屏風の世界の現実とは、『築城図屏風』の中の城郭部分を竣工直後の姿に置き換えたものと同質なのである。

当然、町地の土地所有の論理と公権による収奪の関係が発生する以前の段階にあるはずで、それゆえに地子免除や債権保証といった常住町人の存在を前提とした優遇的施策も全く見当たらないわけだが、この点こそが、右のような過渡的形態を反映しているのかもしれない。

他方、名護屋の時系列上の位置を考えれば、大坂城(豊臣前期)・聚楽第から伏見城へと移行する、近世城郭の発展期に発生した城下町であるわけだが、その時代相を示す要素は、この完成途上の空間からも抽出

し一方では「材木」、「板屋」、「石屋」といった建築資材の範疇に含まれる品目を冠した町名も多い点に留意すべきである。これも「屏風」の描写内容と地名との符合の一例だが、『屏風』中の「材木町」付近を見ると、この谷道に沿う町屋の前に限って、大量の青竹ないし材木が立て掛けられ、浜には陸揚げされたばかりの用材が放置されている様子が描かれている。つまり、その表現からは、松本氏の説にある公権力主導により計画的に編成された同一業種町の姿を見出すべきではなく、その前段階にある火急の



することができるだろうか。前述したように、名護屋の町場地区の短冊状地割には、豊臣期の大坂城下に見られる町場の屋敷地規模との類似性が認められるが、それだけでなく、豊臣前期同城下の町地が谷地形内にも形成されている点（前註1 鋤柄氏論文）で、立地環境上の共通性をも指摘することができる。

また、天正十八年から具体化する秀吉の京都再編構想の内容は、聚楽第を中心に南に向かって下京、方広寺を連ねる帯状の展開を示すものであり、初期大坂城下のプランは上町台地頂部を中心とする城↓内町（平野町）↓四天王寺という直線的配列をなすものであった（図10）。玉井氏はこの形態を、「面的に拡大を試みる前の段階の都市空間のあり方」を特徴的に示すものと捉え、さらには草創期の江戸城下（城↓本町↓江戸湊↓浅草寺）にも見られる「近世初頭の城下町の地形条件に制約された線状の都市形態および寺町の配置の特徴」として規定している<sup>(9)</sup>。基本的には名護屋も同じ形態にあることは、丘陵地に制約された「殿町」地区から谷地の中心的町場「茜屋町」への直列状態によって確認することができ、同じ時代相の都市プランの一類型に含めることが可能かと思う（図11）。

なお、寺地については、寺「町」そのものの存在が未だ不明確であるため、城下で占める位置について論ずることができない。しかし、幾つかの寺院に、陣所設置に伴う移転伝承が付随するのは、中世から存在していた寺地の再編・統合の動きがあったことを予測させるものである。この点は、軍事基地内での宗教施設が受け持った役割、あるいは存在理由そのものからの再検討を図らねばならない。

さて、大坂や江戸が戦国期城下町の要素を止揚して近世都市へと発展したように、名護屋も同様の道程を歩む予定にあったのであろうか。その指向性の内容は、第5章でも触れた武家地北域の傾斜地で認められる、地形起伏に必ずしも制約されない直交差道の展開の様子に窺うことがで

きる。それらは、武家地区から「麦原町」先端に及ぶ1・2km近い東西主要道と、これに直交するように北進してくる「太閤道」およびその延長支線の方向軸に準拠した走向を示している。街区割に近似した何らかのプランが、武家地においては実行に移されつつあった可能性を想像させるものである（図4、図11）。また、「鯉鉾池」東端からは、城下の中心域の東限を規定するかのようになり、一条の小河川が港に向かって流れている。これを「惣構」と同質の都市境界、ないしはその計画線と見るべきかどうかは即断はできないものの、「板屋町」、「塩屋町」などの散在町場がこの川筋の外側に分布する点に留意すべきと考える（図4）。

しかし、「北ノ門」を介した城郭・城下町間の強引かつ応急的な連結措置が、凍結したままの現存遺構は、結局のところ包括的な空間再編への動きが完遂されないままに、この城下町が機能を停止したことの証しと見なせる。そののみならず、大名陣所との未分化状態にある散在的町場の存在自体が、中心的町場への一元化を達成し得なかったことを如実に示している。とは言え、陣所との需給関係によってこの町場が機能していたとするなら、陣所の分立状態が解消され（これは順次出陣を前提とした臨戦体勢の解除を意味する）、本城周囲で大名居屋敷地区の再設営でも行われない限り、統合されることは永久にあり得なかった町場形態でもあった。

この点に象徴されるように、自らの発生理由である軍事基地としての機能自体が停止しない限り、都市機能の一元化が実現し得ないという矛盾した構図の中に名護屋は存続していたとも言える。これこそが、完成途上の「擬製城下町」名護屋の本質なのである。



註

- (1) 佐久間貴士編『よみがえる中世2―本願寺から天下へ―大坂』平凡社 一九八九、森毅「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」(『ヒストリア』一三九 一九九三)、鋤柄俊夫「大坂城下町に見る都市の中心と周縁」(中世都市研究会編『中世都市研究』一 新人物往来社 一九九四)、他。
- (2) 高橋康男『京都中世都市史研究』思文閣出版 一九八三、足利健亮「中近世都市の歴史地理―町・筋・辻子をめぐって―」地人書房 一九八四、堀内明博「近世都市京都の成立について―考古学の成果をもとに―」(『関西近世考古学研究』I 一九九二)、仁木宏「戦国織田政権期京都における権力と町共同体」(高橋康夫・吉田伸之編『日本史研究』三二二 一九九八)、日本史研究会編『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』文理閣 二〇〇一、他。
- (3) 小島道裕「織豊期の都市法と都市遺構」(『国立歴史民俗博物館研究報告』八一 一九八五)、同「戦国・織豊期の城下町―城下町における「町」の成立」(『日本都市史入門Ⅱ―町』東京大学出版会 一九九〇)、他。
- (4) 前川要『都市考古学の研究―中世から近世への展開―』柏書房 一九九一。
- (5) 遠藤才文「城下町調査の成果と課題」(『埋蔵文化財愛知』四 愛知県埋蔵文化財センター 一九八六)、東海埋蔵文化財研究会編『清洲―織豊期の城と都市―研究報告編』一九八九、他。
- (6) 吉田伸之「城下町の祖型」(『年報都市史研究』一 山川出版社 一九九三)。
- (7) 小島道裕、千田嘉博、前川要「戦国期城下町研究ノート」(『国立歴史民俗博物館研究報告』三二二 一九九二)。
- (8) 同氏「肥前名護屋城図屏風」の建築的考察(『国華』九二五 一九六八)。
- (9) 同氏「城下の大基地の町、肥前名護屋」(『地理学評論』四五―三 一九七二)。
- (10) 同氏「肥前名護屋城図屏風について」(『日本歴史』二六〇 一九七〇)。
- (11) 同氏他「特別史跡名護屋城跡並びに陣跡3―文禄・慶長の役城跡図集・解説編」佐賀教育委員会 一九八五。
- (12) (天正十三年) 九月三日付・柳市介(末安)宛・豊臣秀吉朱印状写(『伊予一柳文書』岩沢厚彦「秀吉の唐入りに関する文書」(『日本歴史』一六三 一九六二)より)。
- (13) 戦争の推移の詳細については、北島万次氏の以下の著書に拠るところが大であるので、予め掲げておく。『豊臣政権の対外認識と朝鮮侵略』校倉書房 一九九〇、『豊臣秀吉の朝鮮侵略』吉川弘文館 一九九五。
- (14) 天正十五年五月九日付・「こほ」宛・豊臣秀吉書状(『東浅井郡志』卷二所収文書 東浅井郡教育会、一九二七)、他。
- (15) 「相良家文書」(『大日本古文書』家わけ第五―六九九号文書)。以下、「浅野家文書」、「吉川家文書」、「小早川家文書」、「伊達家文書」、「毛利家文書」は『大日本古文書』に拠ったので、出典表記の際にはその文書番号のみを記す。
- (16) (天正十九年) 八月十三日付・加藤清之、下川元宣宛・加藤清正書状(『洪沢文書』『新熊本市史料編三』近世Ⅰ 一九九四)、『安東統宣高麗渡唐記』(『光武俊和氏所蔵文書』ちなみに本史料は、参戦した九州武士が文禄三年(一九九三)正月十三日に記した体験記録で、現在は佐賀県立名護屋城博物館に寄託されており、その冒頭に「(天正十) 九年拾月七日八日、皆名護屋御普請、九州計(間欠)仰付、…」とある)。
- (17) 天正二十年五月二十四日付・毛利輝元宛・豊臣秀次朱印状(『毛利家文書』九九七)。
- (18) (天正二十年) 五月初日付・小田野備前守宛・平塚滝俊書状写(『東京大学史料編纂所蔵写本「名護屋陣ヨリ書翰」』前註11報告書中、中村質校訂釈文より)、他。以下、この史料は本論中で頻繁に引用するため、その際には「平塚状」と略す。
- (19) (天正二十年) 五日二十五日付・豊臣秀吉朱印状写(『黒田家譜』卷之六所収文書。川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『黒田家譜』第一巻 文献出版 一九八三)。
- (20) 一九九四年の名護屋城内水手曲輪の発掘調査で、「天正十八年五月吉日」の紀年と「四天王侍住人藤原朝臣美□」、「住村与介」との瓦職人と思しき人物銘を刻した丸瓦が出土している(高瀬哲郎「名護屋城の築城と改造について」『研究紀要』第1集 佐賀県立名護屋城博物館 一九九五)。かつて地元住民が城内で採集(出土地不明)した「□八年十一月三日」の紀年銘瓦片や、本丸大手で出土(一九九三年発掘調査)した「住村与介」の人物銘瓦と合わせて、従前からの築城時期をめぐる認識に再考を迫る史料を得たことになった。ただし、これのみをもって着工時期を早めて解釈することは早計であり、いずれかの建造物からの転用瓦という可能性もある。しかし、この頃に大坂城下町への統合が進みつつあった四天王寺門前の職工層が、天正十八年段階から名護屋築城資材の製作に従事していた可能性が急浮上してきた。
- (21) 同日付・有浦高宛・小西行景書状写(『有浦家文書』二二九号「佐賀県史料集成」第二〇巻 佐賀県立図書館 一九七九。以下同書を出典とする場合、「佐」巻数と略す)。
- (22) (天正十九年) 十二月十一日付(『立花文書』『福岡県史―近世史料編・柳川藩初期(上)』一九八六)。また、前註16『安東統宣高麗渡唐記』にも、名護屋築城に参加の後「極月廿二、三日時分帰宅」したとあり、同月に工程の移行があったのは確実と見られ、それに伴い一部では普請従事者と作事担当との交替があった可能性が考えられる。今後、築城の推移について、各大名の渡海準備スケジュー

ルとの対比から捉える視点も必要と思われる。

- (23) 松田毅一・川崎桃太訳註『フロイス日本史2・豊臣秀吉編Ⅱ』（中央公論社一九七七）。本論引用の同史料は全てこの訳本によったので、以下ではその章数のみを示す。

- (24) 『有浦家文書』二八（佐）一九。

- (25) 慶応義塾大学付属研究所斯道文庫編『大かうさまくんきのうち』汲古書院一九七五。

- (26) 永島福太郎校訂『宗湛茶湯日記』財団法人西日本文化協会 一九八四。

- (27) 小葉田淳校訂『大和田近江重清日記』（『日本史研究』四四～四六 一九五九～六〇）。以下、本論での同史料からの引用が頻繁であり、その際には『大和田』と略し、全文が文禄二年中の日記であることから年次を省き月日のみを示す。

- (28) （天正十九年）十月五日付・浅野幸長宛・徳川家康書状（『浅野家文書』六三）、（同年）十一月十九日付・伊達政宗宛・仙石會繁書状（『伊達家文書』六三〇）、他。

- (29) 文禄二年五月十九日付・小早川隆景宛・長束正家書状（『小早川家文書』一四一六）、他。

- (30) 『大和田』六月二十九日条（『官人帰唐之舟御見物アリ』）。

- (31) 『特別史跡 名護屋城跡』佐賀県立名護屋城博物館 一九九八。

- (32) 拙稿「肥前名護屋城の石垣について―その構造の特質と技術史上の意味―」（『織豊城郭』3 一九九六）。

- (33) 『青丘学叢』十一号（一九三三）所収。明国冊封使に随行した朝鮮国官吏黃慎の紀行録である。

- (34) 他方でこの施策は、同地での公用価格の確定によって一般取引での米価急騰を抑制する意図もあったはずだが、『大和田』六月二日条の「町にて米代物買、此代四貫百六十、米三石七斗五升、但老斗式升五合ツ、也」との記事から、名護屋の市場価格では米一石が錢一貫一〇九文で売買されていたことが理解できる。豊田武他監修『讀史總覽』（人物往来社 一九六六）の「中世物価表」（朝尾直弘氏担当）では、『多門院日記』の天正二十年十月から文禄二年十月までの記事の分析から、その一年間の米価を一石五八八文と試算している。従って、大和地方のみからの比較ではあるが、名護屋ではその一・五五倍から一・八九倍という高値での取引相場が通用していたことになり、需要先行型の市場経済にあったことが理解できる。

- (35) 『神谷宗湛日記』天正二十年十月三十日の記事。

- (36) 吉村茂三郎編『松浦叢書』第一巻 私家版 一九三四。

- (37) 中部よし子『中世都市の社会と経済』日本評論社 一九九二（二一〇頁～二一九頁）。

- (38) 『吉川家文書』一一二三。

- (39) 檜谷昭彦・江本裕校注『太閤記』（『新日本古典文学大系60』岩波書店 一九九六）。

- (40) 『有浦家文書』中の五月十九日付・「ありのうら上下きもいり百姓中」宛・「興村」・「伝蔵」連署書状（『佐』一九）によれば、名護屋の南方六kmに所在する有浦村では、田畑の荒廃が深刻化していたことが理解でき、「猶かうさくの儀ゆたんあるましく候」、「あれちのかき付、今日二いたりまいらす候間」（中略）…何とてあんにん候哉 くせ事共候」と、村役に対する代官（？）の譴責が記されている。その直接的原因是「ふしん衆むさく申候ハ、なこやへちうしん可申上候」とあるように、度重なる名護屋での城・都市建設現場への労働力流出による耕作能力の低下と見て良い。

- また、フロイス『日本史』第一〇六章にも、肥前大村からの建築資材、職工層（大工、鍛冶屋、木挽き、船員）の徴発について触れており、強制・自発を問わず、近在近郷から新興都市・名護屋への人口流出が甚大となり、大きな社会問題と化しつつあったことを窺わせる。

- (41) 同氏「雑兵たちの戦場―中世の傭兵と奴隷狩り」朝日新聞社 一九九五（二四三頁～二六一頁）。

- (42) 文禄二年正月日付・「出雲国中其外所々留守居中」宛・豊臣秀次朱印状（『吉川家文書』一一二六）。

- (43) 前註13北島氏著書（一九九〇）三二八頁～三二九頁。

- (44) 名護屋ではなく渡海中継地の壱岐勝本での例だが、田尻鑑鐘『高麗日記』天正二十年四月十五日条には「主水一人はしり候をあふられ候」との目撃談が記されている（北島万次校註『朝鮮日々記・高麗日記』そして一八九二）。厭戦気分からの滞在陣夫の逃散は後を絶たず（文禄二年四月三日付・「但馬国留守居中」宛・豊臣秀吉朱印状『浅野家文書』二六四）（高麗并名護屋長陣付而、下々令退屈、逐電族可有之候）、『大和田』六月四日、七日条によれば佐竹陣に陣衆の「御人数しらへ」のための査察が入るなど、退転者摘発が常態化した殺伐たる城下の雰囲気も感じられる。前註40に見た人口流出による近隣農村の荒廃の問題を抱えながら、一方では未曾有の労働力需要を生み出したために、その確保に躍起になる政権側の姿が現れている。この都市をめぐる独特の「歪み」の一端を垣間見るものと言って良い。

- (45) 『浜玉町史・資料編』浜玉町 一九九一。

- (46) 里見陣は比定地が全く不明で、大谷、石田両陣は図1に示すように、名護屋浦の南域に比定されている。ただし、佐竹陣跡の近接地には主体者不明の陣遺跡が数箇所あり、そのどれかに各陣が該当する可能性は残る（拙稿「文禄慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）における大名陣跡の諸形態（1）」『研究紀要』第3集 佐賀

- 県立名護屋城博物館 一九九七。
- (47) 『群書類従』第二十一輯 続群書類従完成会 一九八〇。
- (48) 各伝来絵図の記載内容の差異（主に陣の位置と陣主名記載を中心に）については、中村質氏がその対比と整理を試みている（『肥前名護屋城下の諸陣跡について』『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡発掘調査報告書1』佐賀県教育委員会 一九七九）。なお、この絵図は、肥後国衆一揆討伐における「辺春・和仁仕寄陣取図」や、関東攻略時の「小田原陣仕寄陣取図」（いずれも山口県立文書館蔵「毛利文庫」）、文禄の役での「朝鮮国内裏井陣場之図」（名古屋市秀吉清正記念館蔵・江戸期写）などと同種の、豊臣政権側が大軍動員の際に作成した諸侯の布陣図の類を、原版としている可能性を指摘しておきたい。
- (49) 『佐賀県近世史料』第一編第一巻 佐賀県立図書館 一九九三。
- (50) 「従先年御地頭様代々、御上使様御廻り被遊候次第之事」（名古屋政昭氏所蔵文書）。寛保三年（一七四三）成立。鎮西町史編集室の故・原口決泰氏に複写本の閲覧を御配慮頂いた。
- (51) 今井修平「戦国期城下町から近世在郷町へ——摂津国伊丹を中心に」（『年報都市史研究』二 山川出版社 一九九四）。
- (52) 文化十五年二月（九州大学所蔵「松尾家文書」）。唐津市立近代図書館所蔵複写本より。
- (53) 『船宮史料』（唐津市史）唐津市 一九六二。六六二頁～六四四頁掲載釈文。
- (54) 同氏「肥前名護屋城図と狩野光信」（『国華』九一五 一九六八）。
- (55) 小澤弘・川嶋将生「図説・上杉本「洛中洛外図屏風」を見る」河出書房新社 一九九四（八〇頁）。
- (56) 小澤弘・丸山伸彦編「図説・江戸図屏風をよむ」河出書房新社 一九九三（四二頁）。
- (57) 『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡2』佐賀県教育委員会 一九八三。
- (58) 『特別史跡（名護屋城跡並びに陣跡）10—徳川家康別陣跡発掘調査概報』佐賀県教育委員会 一九九三、『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」木下延俊陣跡・徳川家康別陣跡Ⅱ 発掘調査概要報告書』佐賀県立名護屋城博物館 一九九四。
- (59) 『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡4 名護屋城跡発掘調査概報—山里丸発掘調査—』佐賀県教育委員会 一九八九。
- (60) 「一、山里書院五間六間 太田和泉守 座敷何も狩野右京亮画之、尽善也」『太閤記』卷十三「名護屋旅館御作事衆」。出典前註39。
- (61) 前註8論文。なお、一般向けの小文ではあるが、城下各所の現況写真を使用し「屏風」の部分描写と実景観との対比を行ったものとして、拙稿「肥前名護屋図屏風を読む」（『城郭研究最前線—ここまで見えた城の実像』新人物往来社 一九九六）がある。
- (62) 若干先行する時代の例だが、一乗谷の武家屋敷地（一四〇〇m<sup>2</sup>～二八六〇m<sup>2</sup>）よりも相当に小さく（小野正敏「戦国城下町の考古学——一乗谷からのメッセージ」講談社 一九九七（三一頁～四三頁、一二〇頁～一二二頁）、臨時的居住区としての性格が強いとされる江戸初期の京都武家屋敷中の最小クラス（一四〇m<sup>2</sup>）にようやく匹敵する（藤川昌樹「徳川期京都における武家屋敷の成立—「宿」の性格をめぐる—」『宮崎勝美・吉田伸之編『武家屋敷 空間と社会』山川出版社 一九九四）。後世になつての屋敷跡地の分筆という事態を勘案しても、濠に沿った带状地に配列された地割である以上、もともと十分な平地面積が確保できるような地勢環境にはない。
- (63) 川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『博多・筑前史料 豊前覚書』文献出版 一九八〇。なお、同史料中のこの記述の存在は、藤木久志氏の御教示によって知り得たことを断っておきたい。
- (64) 『平野町遺跡（第Ⅱ区）』鎮西町教育委員会 二〇〇三。
- (65) 内田九州男「豊臣秀吉の大坂建設」（前註1佐久間貴士編著に載録）。
- (66) 前註1・森氏論文。
- (67) 玉井哲雄「町割・屋敷割・町屋—近世都市空間成立過程に関する一考察」（『年報都市史研究』二 山川出版社 一九九四）。
- (68) この「卯建」の描写に注目した大塚修氏は、京都を規範とした「都市性」の演出との評価を与えている（同氏「卯建・京都モデルの町家形成—近世町家の在来形式と新興形式 後編—」『建築史学』四一 二〇〇三）。
- (69) 岡村良知氏は「現存する屏風画のうちでは、多分この名護屋城図のそれが、南蛮風人物を添加する畫の濫觴をなした一つではないかと想う」と推論し、美術史上に与えた影響の大きさを指摘している（『名護屋城図の南蛮人』『国華』九一五 一九六八）。
- (70) 一九九〇年に鎮西町教育委員会によって実施された、名護屋城大手口近くの同道の一部園路整備に伴う試掘調査では、幅一間以上の碎石敷道路跡が検出されており、所伝を裏付ける成果を得ている。
- (71) 『氏家行広陣跡—佐賀県立海浜型少年自然の家建設に伴う発掘調査—鎮西町教育委員会 一九九六。
- (72) 『唐津拾風土記』中「法雲山龍源寺事蹟地」の項（吉村茂三郎編『松浦叢書』第二巻 私家版 一九三八）。
- (73) 『松浦記集成』中「清涼山浄泰寺」の項（前註72と同出典）。
- (74) 『松浦拾風土記』中「名護屋六坊之事」の項、他（前註36と同出典）。
- (75) 同寺の住持「鏡空律師智山」が、元禄三年（一六九〇）に「数篇之旧記」及び老僧（四代住職不遠）の口述に基づいてまとめたとの奥書を持つ。同寺蔵。
- (76) 内藤雋輔校注「朝鮮日々記」（同「文禄・慶長役における被虜人の研究」東京

大学出版会 一九七六（五六一頁）六六〇頁。

(77) 現在「茜屋町」内に位置する専称寺は、承応二年（一六五三）に焼亡し再築されるまで同町区の南側丘陵上の木下吉高陣に隣接していたとされる（『鎮西町史』鎮西町 一九六二（二六三頁））。確かに木下陣跡の南東側高所には「伽藍ノ元」との呼称地名が残っており、或いはこの伝承を裏付ける痕跡かもしれない。

(78) 城下町建設における造成地業の意味については、前川要「地割論—近世城下町成立期における盛土整地の意義—」（『関西近世考古学研究』I 一九九二）参照。

(79) フロイス『日本史』第三十五章には、「老」関白はただちに（家臣に向かい）、下の地方（九州）には、軍勢を朝鮮へ比較的容易に渡航させるのにいかなる港があるか、と質問した。（家臣らは）肥前国のドン・プロタジオ（有馬晴信）の兄で波多殿（波多藤童丸鎮）という異教徒の武將の領内に、名護屋というきわめて良い港がある。そこは平戸から十三里距たっており、一千余艘の船が安全に出入りでき、同所から朝鮮へ渡ることは容易であらう、と答えた。」との記述が見える。

実際に名護屋浦は、外海への開口部から湾の最奥部までの距離が約二・二kmに及ぶ、極めて奥行きが深い袋状の海岸線をなす。港内の最大復員は五〇〇m、水深は二五m以上を測り、国際避難港に指定されている点にも、その停泊条件の卓越性が現れている。また、小丘陵が密集する起伏の激しい陸上地形は、広大な平地面積の確保を期待できない反面、軍団間のトラブルを回避するため独立分在した大名陣所の配置を行う上では、かえって好都合であったとも言えるだろう。

(80) 今回、調査不足により多くを語れないが、町場と武家地の分立状態については、先行する中世名護屋の集落構造との関係を、ある程度考慮する必要があるように思う。名護屋城成立以前の同地は、『海東諸国記』（田中健夫注釈『海東諸国記』〔岩波文庫三三—四五八—〕岩波書店 一九九二）に「丙戌年遣寿蘭書記来朝、書称肥前州上松浦那久野藤原頼永、…（中略）…居那久野、」と著されているように、在地領主「那久野（名護屋）」氏が居する東アジア交易圏に位置した港湾集落であったものと見て良い。名護屋城地は名護屋氏の居城「垣副城」を活用したものと伝承が、大手口周辺の発掘調査では十六世紀前半代以前の遺物が出土している（『名護屋城周辺遺跡ふるさとづくり特別対策事業に伴う発掘調査報告書』鎮西町教育委員会 一九九四）。また、「殿町」の東には名護屋経述墓所の伝承地が所在する「古館」地区がある。これらのことから、豊臣期の城地と武家地が位置する丘陵上のどこかに、中世の名護屋氏の居館を核とした生活空間が位置し、海岸線には港湾に付随する集落が発生していた可能性が指摘できる。

戦国期以前の城下集落の普遍的な有り方からすると、城館と経済圏とが別個の編成原理に基づいて分在し、両者間に一定の距離を置いた形態での空間構成を推測することができる。無論、豊臣期の城と城下とは比べようもない規模のはずだ

が、この二元的構造の集落が、次代の名護屋城下町の空間区分にどの程度の影響を与えているが今後の検討課題の一つであり、特に町場の発生母体を探る上では看過できない。

(81) 宮本雅明氏は、城下における町人地の類型整理の中で、空間序列が強い縦町型城下町の町区には「頭」と「尾」や「本」と「末」といった付帯名称が多いことに言及している（『城下町の空間類型』『年報都市史研究』二 山川出版社 一九九四）。名護屋の前掲「マチガシラ」は、町場の中で最も城側に近い位置という意味での「マチ」の「カシラ」と解釈できる一方、その他の町場地名には次位に列する名称がない。つまりは町人地と武家側の世界との接点を示すにすぎず、町地相互の序列性との関わりとは無縁の呼称地名と言える。

(82) 同氏「大坂城の歴史と構造」名著出版 一九八八（四四頁）五〇頁。

(83) 拙稿「名護屋城の空間構成再考のための提言—城内石垣の巨石が語るもの—」（『研究紀要』第1集 佐賀県立名護屋城博物館 一九九五）。

(84) （天正二十年）三月十三日付・浅野幸長宛・豊臣秀吉朱印状（『浅野家文書』七七）。

(85) 天正二十年五月十六日付・「九州衆」宛・豊臣秀吉朱印状（『毛利家文書』九二七）他。

(86) これら開戦後の各種措置の発令経過については、前註13北島氏著書（一九九〇）三五九頁—三六二頁に詳しい。

(87) （天正二十年）四月二十八日付・毛利輝元宛・豊臣秀吉朱印状（『毛利家文書』八七七）。

(88) 玉井哲雄氏は近年、近世初期の大規模都市をめぐる「首都性」というキーワードから、名護屋を俯瞰しようと試みている（『都市空間に表現される首都性』『年報都市史研究』七 山川出版社 一九九九）。

(89) 同氏「城郭と権威」（『岩波講座日本通史』第11巻 岩波書店 一九九三）。

(90) 同氏「築城図屏風」を読む（『朝日百科・日本の歴史別冊—歴史を読みなおす6—朝日新聞社 一九九三）。

(91) 同氏「都市の計画と建設」（『岩波講座日本通史』第11巻 岩波書店 一九九三）。

「追記」本論は、一九九八年に共同研究報告として一旦は脱稿・提出したものののだが、それから約八年間のタイム・ラグが発生してしまっている。その間、名護屋城跡と周辺の発掘調査は着実に進展しており、その多彩な成果内容を、今回の改稿において十分に反映させる時間的余裕が無かったのは甚だ遺憾である。しかし、結果的にその調査成果が、本

論の全体の骨子に大幅な見直しを促すものではないと判断できたため、初稿の論旨の修正は最低限に留められた。ただし、仮説の補強材料となり得るいくつかの新知見を整理し、付加することができなかった点が悔やまれる。

また本論では、都市「名護屋」のもう一つの重要な構成要素である大名陣所については、多くを触れていない。これに関しては、各陣所が大名屋敷としての性格を持つ反面、城下町内の空間配列上に決定的な規制力を必ずしも及ぼす存在ではない（散在型町場との共存関係は別として）と現時点でも認識しているため、詳述をしていない。ただし、近世武家屋敷成立の前提としての、臨時居住施設の役割という新たな課題（藤川昌樹「近世の武家屋敷と都市史研究」『年報都市史研究』二二 一九九四）からの検討が、別途、必要である。この視点から見た名護屋の陣所については、最初の脱稿後、以下の小文によりその概要と特徴について論じる機会があったので、参照を願いたい。

・「陣」を再考する―武家社会下の仮設要塞の実態―（『歴博』一一四 国立歴史民俗博物館 二〇〇二）。

・「基地の都市」「肥前名護屋」の空間構成」（『中世都市研究』10 新人物往来社 二〇〇四）。

とりあえず留保した形となってしまうこれらの課題を含め、別の機会での名護屋の総括的な考察を期したいと思う。なお、本論を成すに当たっては、藤木久志氏、故・小林健太郎氏より示唆に富んだ御教示を頂戴した。末筆ながら謝意を表したい。

（佐賀県教育庁文化課、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇五年五月一七日受理、二〇〇五年七月一五日審査終了）

## **The Spatial Structure of the Castle Town of Hizen Nagoya and Its Peculiarities**

MIYATAKE Masato

Having served as a base for Toyotomi Hideyoshi's invasion of Korea, the existence of Hizen Nagoya as a subject in the discussion surrounding cities in Japan has long been overlooked due to its special characteristics and the circumstances behind its formation. In actual fact, however, the first point made in this paper is that the remains over a wide area and the excellent condition in which the old landscape has survived make Hizen Nagoya an extremely useful source for investigating the specific details of the constituent elements that mark such cities.

A commercial zone worthy of recognition as an international city grew in the area surrounding Nagoya castle that came into being as a result of a booming military economy, against a background of policies for market operation by the authorities whose aim was to attract merchants. At first glance the spatial structure is a unified organization with Nagoya castle at the center and the residential district that housed the troops under Hideyoshi's direct control and the town district situated next to each other facing the harbor. In reality, however, the town district, which occurred spontaneously relying on the port, and the district containing warrior residences, which was predicated on its association with the castle, merely adjoined one another while possessing separate origins. As such, it was an urban space with tenuous integrated planning where the division of space was left to a steeply undulating topographical environment.

In qualitative terms, the town seems to have developed economically while the castle town was still in the process of being built, as if it were an extension of administrative areas that oversaw different commodities such as military goods and castle construction materials. Having a distribution of scattered townships around the perimeter of the town center indicating sites that may have been associated with daimyo encampments, this castle town is characterized by a multilayered structure. On the other hand, in terms of traffic on the streets and the size of the plots of land, it is possible to recognize elements that the town had in common with the castle town of Osaka, as well as Kyoto after its reorganization. Consequently, the point can be made that Hizen Nagoya displayed some of the features of the Early Modern period, the period during which castle towns were formed.

These peculiarities may be directly attributed to the initial plan when Hideyoshi was establishing a base for the primary purpose of making a spontaneous sea crossing to Korea. However, it is conceivable that the town become more and more like a coastal castle town as Nagoya developed into a capital as a result of the prolongation of the war. Consequently, there would have been an attempt to impose traffic connections between the castle and the area around it regardless of whether there was any intrinsic attraction driving access to the castle. However, Nagoya's function is thought to have ceased before the town could be comprehensively redesigned.

---



〔『肥前名護屋図』屏風(全体)〕  
(佐賀県立名護屋城博物館所蔵)